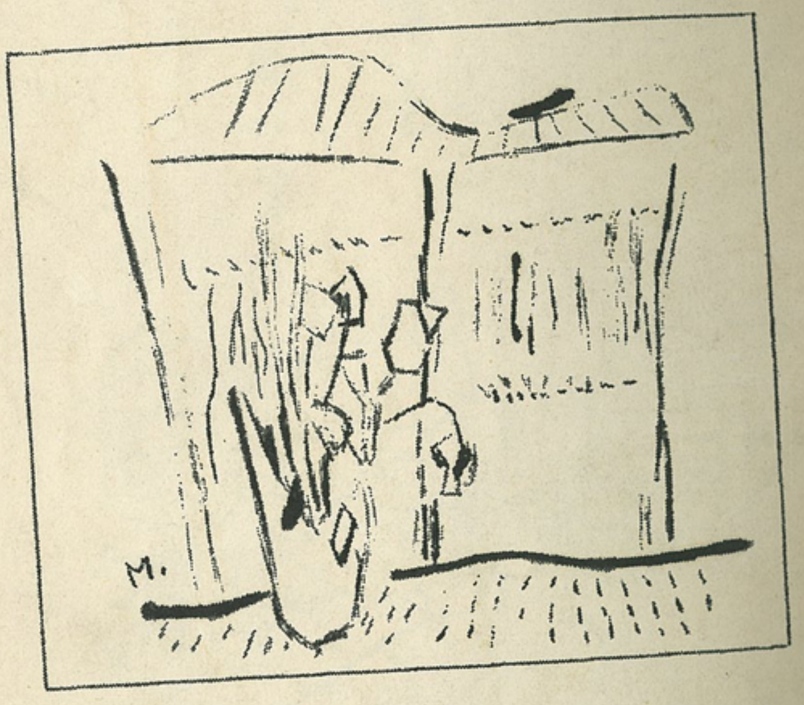
資料
革沿

えめらるど

復刊第一号

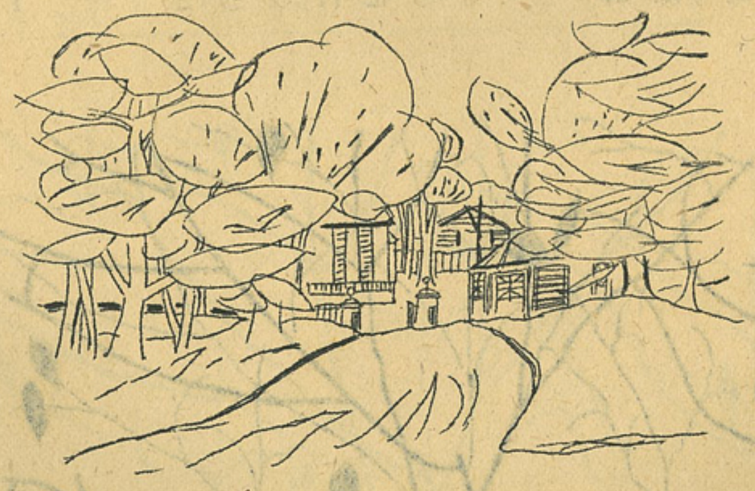


商大四寮誌

/2
8
41

えがらるど

復刊第一号



―巻頭言―　F記　1

―随想―

何時も想う―寄宿舎生活の在り方―　岡本理一　2

断想　加賀谷隆男　3

味噌汁―大雪山紀行―　吉田克己　6

ずれ　金沢鉄二　11

日記について　寺本紹宗　12

ニックネームについて　久松嘉一郎　15

かおず　塚田早苗　18

―詩―

僕の視覚の　デォルメが……　高木修　64

Etude　守分嘉男　66

―無題　巻口徹　68

座談―Mさんの話―　乙生　69

燕　福原亜一　73

日本経済の成長率と人口問題　笠原賀三　24

民族解放運動に思う　清水彦三　29

「マルクスの失業感」　ジョン・ロビンソン　田村美夫訳　33

ヒックスの厚生経済学　篠崎晟　45

ケインズの社会観　中川宏　52

中国文化の指向するもの　吉岡卓二　56

小説読んだきず―小説港昔話―　加藤寛　59

編集后記

巻頭言

北国の緑の世界は短い。春の薄いしたゝるような緑は、すぐに夏のどぎつい濃緑に変る。ともう、しみ入るような秋の青空を反映して異彩ある緑色をたゞよわせる。それはエメラルドの輝きだ。それは同じ世界から反射された異種の色合だ。

吾々の心は何か具象化を求めている。同じ屋根の下で同じ学舎で生活して来た相互の心の具象化を。緑が丘の玉の井の世界にもその種が芽生え、やがてそれは結晶した。さゝやかな各作品の中に、その人の心の結晶が光る。奥深く秘めた理知の光は無限の青みを帯びた深海のそれのように冷厳で黄い。明るく照り映える黄の輝きは希望の太陽だ。

温いふんわりした情緒と人間味をたゝえた色合が黄色だ。

二つの色合が美しく調和融合した時、自然の美をたゝえた緑の不思議な光が生れる。理知と情緒の融け合った人間性を求めるものはたゝえめうるどゝの無限に深みをたゝえた鮮明な緑の光に魅せられる。吾々は求めている。――その光を。

小さな心の結晶が赤熟であろうが、今ここに出来上った。私達はそれを心から喜び、その結晶がより美しくみがかれより輝くことを祈りつゝ未来への踏台としたい。

（R・F記）

いつも思う

―寄宿舎生活の在り方について

岡本理一

「最高のものは望めなくても、最低生活だけは、一応、確保せられる」――これが今日の寄宿舎生活において、学生諸君がうけている一つの利点ではないかと思う。とくに経済的な方面において。

そこで、今日、寄宿舎をもって、一つの「厚生施設」とみることは、なんの疑う余地もないであろう。市中の下宿よりも、食費や住居費など、どれも安い費用で日々の暮しができるということは、次才に経済的困難性の増大しつつある学生諸君――ひいて父兄の経済的負担を軽減するのに役だつこと、まことに大きい。

とにかく、当局も学生諸君も、それが「厚生施設」としての重要性をもつことを十分に認識し、今後の運営や施設改善などを考えていかねばならぬ。

。

ところで、今日の寄宿舎が厚生施設としてはなはだ大切な機能をもっているとしても、それを家賃や食費の安い下宿屋やアパートと同じように思ってはならない。もし父兄や学生諸君のうちで、寄宿舎に入った方が「安あがりだ」――というような至済的考慮だけで入寮を希望し、また現に生活をしているものがあるとするならば、それは、他面にもつ寄宿舎の機能に暗いことおびたゞしいといわねばならぬ。なぜなら、寄宿舎は、同じ学園に通うものが集団的に生活をいとなむ場所であり、広い学生生活の目的達成上からみるならば、学問の研究や教養の向上をはかるに必要な行事がなされなければならぬからである。つまり、学園の延長として、また集団生活をひとなむ場所として、それは単に食事をともにし、宿泊をするだけでなく、さらに文化的なものを求め、生んでいくところに、寄宿舎のもつべき一つの重要性が存在するのである。

。

もちろん、それかといって、今日の寄宿舎を、昔よくいわれたような「精神修養の道場」などとみることは正しくないであろう。経済的厚生の面を無視して、そのような精神面のみを強調する人があるとすれば、それは寄宿舎の実情にうとい思弁的偏見というほかはない。自治的精神の涵養などと唱えてみても、本来、生活の基盤となる食、衣、住などの諸條件を無視しては、決して達成されるものでないからである。そこで結局、今日、寄宿舎の存在理由となるものは、一面、「厚生施設」としての重要性をもつと同時に、他面、

「文化施設」としての機能をはにすところにあるものといわねばならぬのである。

。

以上のようにみてくると、冒頭にかゝげた一句は、たしかに一面の真理を示していても、なお、寄宿舎の在り方を全面的に表現していないうらみがある。「最高のものは望めなくても」――というにが、それは、食事や住居など経済的な方面についてみたまでのことであって、もとより、文化的な方面を意味しているのではない。勉学、討論、趣味、娯楽――など、これらは寄宿生活で修練されること受ひが、どれも最低のありきたりのもので満足すべきでなく、できれば最高のものを目指してすすむべきであろう。換言すれば、にとゝ経済生活の面では最低で辛抱しても、文化生活の面では最高を目指していかねばならぬのである。

かくて、「最低の至済生活と最高の文化生活」――これを目指して、少しでも多く実現していくところに今日の「寄宿舎生活の在り方」があるように、私はいつも思うのである。

断想

加賀谷隆男

女性は実に自分の年令を気にする。試みにその人に相当する年令以下に、「貴女は若いですね」といって見給え。彼女はどんなに喜ぶことか。若いと言われて喜ぶのはすでに老いに証拠だといわれる。「貴女は若い」というのは女性につけいるドンファンの常套手段である。かゝる男につけいられるのは女性の側にそれだけのスキと驕慢さとがあるのである。かゝる女性の受いことは、女性評価の基準が若さだとか美貌とかいう動物的な表面的なものにあることを暗黙の中に女性自ら承認することになる。いわゆる原始的な雌性の美である。女性評価の基準をかゝる所におく者の受ひことは、一方長らく封建的体制の中にあって女性を作り上げの人权を認めず玩具として人形として女性を作り上げて来た男性の側にその責任があるのであるが、他方男女平等の現代においてもその非なることを実際行動を以って示さぬ女性側の無自覚、無気力、無識見にその責の大部分があるように私には思われる。

目を転じて現代の若き女性の生態を見よ。

自己の若さを保ち美を増進させることに狂熱する女性のいかに憂いことか。軽薄な流行を追い虚栄心の満足のみを嫌ゲ女性のいかに憂ひことか。かくて彼女らは真知子の運命に泣き、ヘップバーンスタイルに心酔しファッション・ショウが繁昌し美容院が満員となる仕儀におちいるのである。彼女らの眼が外に向けば向くほど内面的な美しさをみがくための修養はそれに比例して減退してゆく。特に結婚后は殆んどの女性は人間的向上への努力の一切を放棄して家庭の中にとじこもってしまう。

これに反して男性の場合はどうであろうか。若いひとしいわれて喜ぶのは棺桶に片足つっこんだお爺さん位のものである。「若い」とい う言葉は軽蔑と嘲笑の意味をこめていわれる。それは未熟と未修養の代名詞である。美貌にくらべても同じでよく「のっぺりした美男」と云われる。男が美しいことへの蔑みである。男性の評価の基準は外面的なものにあるのでなくて内面的な強さと美しさとにあるのである。男の真の風貌は中年をすぎてからできると云はれる。その人の人間的修養と向上の度合によって、教養と知性とが内面からその人の生来の顔をデフォルメしてゆくこの顔を形成してゆくからである。形成された人格が外面にしみ出してそれを変形してゆくのである。女性にも中年を過ぎた人の中にはにまにそういう人が見られるように思う。

我々の目的とすべきものはかかる内面と外面の合致内容と形式の統一であろう。外面をかざりよく美しくせんとするものはますます内心の陶冶と充実を図り、そこよりしみ出す内面的美しさを以って外面を輝かにすべきである。外面などにこだわらずに専心自己の修養と向上に努める人は労せずして自らしみ出る風格をもって外面を豊に飾るであろう。

問題はかかる外面と内面、形式、内容のアンバランスである。自分の精神的向上を図ることを忘れ、心の美しさを忘れて徒らに流行と快楽のまにまに漂い流れる現代女性のいかに醜いことか。学問への精進を忘れて刹那的快楽と刺戦を求めてうごめく学生のいかに憂いことか。二十世紀の不安のなかにおける思惟は憂分に虚無的傾向を我々に与えるであろう。しかし問題はこれ以前にある。我々の生存は意義があるとかないとか、人生は楽しいとか苦しいものだとか一般的に断定する前に我々が認認せねばならぬのは我々が現実にこの世に生をうけて現実に生存しつつあるという事実である。生存のためのよりよき条件を作り出すこと、これが我々経済学徒のなすべき唯一絶対の任務である。このために我々が予めなすべき仕事は膨大無辺であり時間は余りにも短い。私が我々の社会的要求を実践に

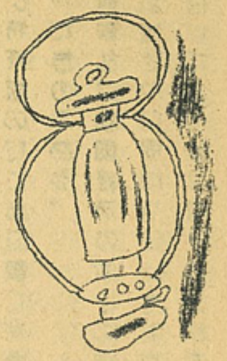
移す前により深く理論の研究のために身を沈めなければならぬと思うのもこの点からである。遠くまでとぼうとするものはまず身を深く沈めねばならぬ。我々はかくて刹那的虚無的思索と行動を超えねばならないのである。

かゝる内容と外形との不一致は現代社会の種々相の中に強く表れているのであるがそれは単なる個人の問題ではなく国家の国民全体の問題としても現れる。昭和二十八年度我国財政収支は膨大な赤字を記録し、我国経済は累卵の危機に瀕している。この原因はいろいろ、でもなく内需の異常な膨張にあり消費と投資の購買力の急増である。これは政府の無見識な怠慢と緩慢な政策、業者の安易な依存心がもとにあり、更に根本的には我国民性に最大の原因があるのである。即ち少し事情がよくなると全く無思慮に自己の実力以上の消費をし外面だけを美しく飾り内面における強化と合理化と充実は全く等閑に附される。このような内面と外面との矛盾対立は男・女・国民・政府と通じての日本人の悲しい特性なのだと私は真に今春の旅からえに体験から思ったものである。

朝鮮動乱は我国経済の救いの神だったという人がいるが私はそうは思はない。それは確にその可能性をもってはいたが、我々はその活用を誤ったのである。

ドイツやイギリスはその好例を十分に生かして自国経済の自立化と強化と推進して立派に経済復興をなしとげた。一人日本人は米国に甘えパンパン経済に満足し朝鮮動乱のアブク銭に酔いしれて乱費と享楽の義行を辿り今日のような破滅の危機に瀕しているのである。我々はその時こそ資本蓄積を行い設備と技術の近代化合理化につとめ労働の生産性を高めることによってコストを引下げ貿易上の競争力を強めて経済の基礎を固めてそれによって経済の自立と国家の真の独立を図るべきであったのである。

我々はドイツ、イギリスの耐乏と努力、換言すれば彼らの国民性との競争の前に完全に敗れ去ったのである。問題は経済的技術的なところにあるのではなくもっと奥深いところにある。我々は個人的にも社会的にも徒に外面的、感覚的なものを追い求めるのでなく内面的、理念的なものに眼を向けてその充実と統一、内面の外面への反映、滲透を図るべく我々の決意を固め努力を傾注するようにしなければならない。



味噌汁

〜大雪山紀行〜

吉田克己

ブルトーザーの騒音にも慣れて現場でぼんやりしていると T氏に大雪登山を誘われた。同じ現場にいた Y氏も登るとひろのので即座に話は決った。現場から見た空模様は濃い雲に覆われて雨にでもなりそうであったが、奥の視察から帰って来た T氏が頂上附近は晴れていると云うのだから断る事もあるまい。早速事業所へ戻り、丁度他の現場から引けて来た C氏も加へて一行四人、思い思いに準備をする。近所の飯場から飯盒を三つ借りて来て、味噌、海参、梅干、適当に切った長葱を入れ、着換え、雨具、二升余りの米等と一緒にして二つのリュックに詰込んだ。どちらも相当な嵩と重さになった。その間に T氏は温泉街の土産物屋から羊羹類を買い漁って来た。同じ店で Y氏と C氏は華奢なピッケルを買った。私のは O氏から借りた荒削りの樺の棒、じゃ最適の登山杖である。

今年建つにばかりと云う美しい登山事務所で記名し石室一泊の許可証を受取る。一合目を過ぎてからリュックの担い手が交替した。私は T氏と交替したが、途端に身体が軽くなり、宙を跳び歩くような感じになった。二合目ちょっと過ぎたところのベンチで一服し、漸く疲れた気になる。それでも先日散歩がてら行ってみたパノラマ台より勾配が緩く楽な林に思う。四合目でも小休止、この辺が皆々素人にとっては難関の一つである。一行は割と元気で歩を進めたけれども担い手交替が頻繁となる。気の利いた処を選んで写真枠に收めることも忘れはしない。

六合目、昨日一寸と下り坂の処では楽だと云うより勿体ない感じの方が強い。泥んこ道が少し続いて下山の人達に「御苦労さん」と声をかけられたりする。七合目、T氏はそろそろ弱音を吐き始めた。しかし益々快調に登り続ける Y氏に遅れじとかなければならない。身近に迫って来る雄大な山々を背景にパチリ、パチリ。迂闊にも水筒を忘れたのだが、急激に喉の渇きを覚え、道を少し左に外れた辺にちょろちょろ流れて

いる湧き水を見つけた時には、我を忘れて貪るように飲んだ。せゝらぎに腹這いの恰好で冷たい湧き水に唇を浸したときの嬉しさ！ 「して又その水の美味さ！」 誠に「美味しも美味しこの上なし」である。八合目と十合目の道標を見落し、二合目かったとか。九合目、C氏以外にピッチを上げる。十合と覚しき辺で休憩。空腹での極に達せんとする程で、おにぎりを持って来るんだったと悔みながら豆菓子を頬ぱり頬張る。気温が幾分下ったらしく、汗に濡れた下着が冷い。リュックから上着を出して着る。この辺からいよいよ寒くなって来たカーブでもピッチを上げるかのようだ。

おゝ、五年振りの黒岳頂上よ！ 突風を予期して登山帽を手にとり、歓呼の声を放ちながら、日焼けしたような山頂の岩の上を走り廻る。絶壁から腰を押へてちらひながら下界を覗き込んだ。清流が静々と上川の市街に注ぎ込んでいるのが印象的だ。

「ヤッホー」。 こちらからの一声が石室まで届いたと見え、レインコートを引っかけて出て来た青年が寒そうに、「ヤッホー」と答へた。「チーチッ」鳴き声に続いて雪渓の向うの岩の間に鳴き虫が頻を出した。ちょろちょろと嵐のようである。他愛もなく暫くから小石を投げてみたら、また現れたので思はず雪の上をその方へ走り出したりした。世界でも珍らしい動物の一つだと云うから心ある人がこの林を見たら眼を立てたかも知れない。此処の雪は白い粗目としつたところで、シロップでも用意してあると直ちに高級氷水が出来上る。

大半枯れてしまったようなお花畑だが、それでも赤や黄の小さな花を咲かせて、疲れた眼を和らげ楽しませてくれる。薄暗い石室では、管理人とひろ名の若者二人と東京の学生二人とが食事中であった。私達も早速夕飯の支度にかかった。水がめまり冷たいので米を磨ぐのも容易じゃない。ストーブの中の薪はよく燃えていて直ぐ出来る事は解っていながら、かの空き腹がしからしめるまま、歓められた若者達のカレーライスを御馳走になった。お蔭で腹の虫は收まったといっても、特に辛かったことは附記せざるを得ない。新といってもそこらから集めて来た枯れ木も混っているらしいので、Y氏が良い木を選び、ジャックナイフで器用に箸を作り出した。途中で火が消えかかったりして不調になったが、やがて飯盒めしも出来上り、背景って来て来に長恋、海参がふんだんに入った味噌汁できたまた猛然と喰らいつく。味噌汁の美味さはまた格別だ。本当に如何に美くの形容詞をつかってしても形容しきれないだろう。ふっと、観光客相手のバスガールに一口飲ませてやりたく思った。きっと実感響った名ガイドと

なれるだろうから。確か彼女らの案内文句の一節に味噌汁のことが出て来たように思う。食后の果物には麻柱の鑵詰、果て夜きにポケットウィスキーを買い求めた。貧乏臭いこの石室だが案外ちゃっかりと商賣をしている。そう云へば、かの鳴き虫、買う人によっては一万円も出すそうな。

狭い部屋を囲んでいる板壁一面に、幅二寸、高さ一尺程のベニヤ板をぶらさげてあったのは、我宿者のサインである。中には凝った風景畫をものしているのもある。知った人のサインも沒々見受けられたが、わが四寮生の名を見出したときは親しみに懐しさが加わった。「小樽商大何某」と達筆に書かれに傍に同行者、日附等が記されてあった。「あのベニヤ板がないと、そこら中に書き散らされ、及物で彫り込んで行く者をえあるる。」と若者はひっていたが、なる程と自い思い付きである。古くなれ焚附けにでもなろうと云うもの。

田舎じみたランプに火が點され、ハンカチに記念スタンプを捺したり、焼鏝で「大雪山頂上」とピッケルに焼つけたりした。東京の建中が本場の茶の葉だと云ってお茶をいれてくれたのも、忘れ得ぬ香りを保っていた。山での飲み喰いは何でも最高に思えるらしい。

単独行の三十男が旭岳へ向ったまま八時過ぎても帰らないと云うので、若者は身仕度して出掛けた。行違いに当の男がのっそり帰って来た。文字通り無一物の身軽さで、山には相当慣れているように見受けられた。けれども旭岳への道を間違えたとかで途中熊の足跡を見たときは気味が悪かったと話しながら、ストーヴに暖附いていた。間もなく若者も戻って来たが、無駄足に腹を立てている様子もない。「あなた方の日頃の行いがいゝから、天気は上々ですよ。」とお世辞まじりに教えてくれた。用を足しに冷え冷えとした外へ出てみると、西方遥かに夕日沈む方は、真紅、密柑色等で綾なせるように美しい。月もくっきりと見え、星さえ出ていて落日とのコントラストが面白い。暫し陶然と眺めていたが、氷点下の温度には堪へべくもなく、小屋に転げ入って煖を取った。なかなか温まらないのが癪に障る。軍隊生活での経験を生かしたT氏に倣い毛布六枚で寝床を拵え潜り込んだ。十時少し過ぎていにだろう。

零下何度位だろうか。ひどい寒さに早くから目が覚める。鼻が冷えるので潜ると足が出ると云っに塩梅で温まりようがない。昨夜の約束を忘れたのか若者は起してくれない。小さな窓に薄明りを覚えて起きようとしに時、T氏が「四時五分前！」と叫んで跳ね起きた。他の人達も寒さに起されたらしく、すぐ起上って支度を整えた。日の出を拝まんとするのだ。東京の二

も同行。二つにたんだ毛布を被った姿はラマ教徒孙たい。小石を二燈程持ち上げた露柱の上を桂月岳へ向ってさくさくと踏み進んだ。岩の窪み等の溜り水には薄く氷が張っている。低そうに見えた桂月岳だが、かなり難儀する。松脂だらけになりながらの直え松登りも楽じゃない。途中、C氏の他は皆毛布を放り出してしまった。とにかくやっとのことで桂月岳頂上に辿りついた。一面、珍妙な奇岩に覆われて造物主の妙を達嶺なく発揮している。東方はしだいに赤色を増して來た。二台のカメラは同称に調整して待機、日の出はなかなか旨く撮れないそうだが。

到底日の出時の美はわが拙筆につくしえないが何とか逐一的に書き続けよう。遥かなる下界を見渡すと、名残りを惜しむ星のような電灯の明りが充ず目に入った。七号（隧道工事現場）附近であろう。ぽっつり赤く見えたのは温泉マークのネオンかもしれない。黒岳の東には真白な一群の雲が微動にせず浮んでいる。天女のベッドを描きたいと欲する画工がいるならば、あの純白の雲をこそ見るべきだ。益々辺が赤らんで来て、東方の雲が太い金色の折線でくっきり縁取られた途端、「御來光！」と歓声をあげてシャッターを切る音が聞える。きらきらと肉眼を焼きつけるかと思われる太陽が、金縁の雲の上に顔を出したのだ。思はず手を合はせて拝みたくなる程神々しい。時に四時三十五分。直え松の線がはっきりして來る。太陽の下を離れるに従い、黒、青、緑と変化する山々。その間の白雲。絵のようにとしうより大自然そのもの。美酒で心楽しく酔った面持で桂月岳を降り始めた。下を潜って行けそうな直え松なので、油断すると足が松の根元にまでも取って行かれそうである。登る途中で放り出して來た毛布の在り所が解らなくなった。直い松の背が高くて見透しが判らない上に、どの松も同じような恰好で同じような方向に伸びていて、見当のつけようがなかったからだが、漸くみつけ勇躍石室へ戻った。露柱を故意に踏みつけながら大分昇った真赤な太陽を見ていると、それを一人占めしたような錯覚と優越感を覚えた。

再び味噌汁をつくり、昨夜の飯盒めしを温めて、そそくさと早い朝食を済ませて、毛布類を片附ける。東京の二人が旭岳を越えると大きなリュックに埋まっているのに引換え、私達は北鎮岳までの予定で何一つ持たなかった。商所にパックを求めて写真を撮ることに專念すると云った楽な行程である。ぶくぶく湯気を立てている有毒温泉に魅かれて噴出口迄下りて行き、姑玉子を想わせる硫化水素に頭がくらくらしたりした。昨日の疲労が手伝ったのか、上り坂はちと堪却、旭

岳に続く「馬の背」と呼ばれる峯を二つの黒い点が蠢いている。かなり急な岩山を登りつめると指示台とでもいうのか、磨き上げた黒い円形の石が設けられてあった。磯石林に方角を刻み込み、辺の山川の名称、附近町村の名称等がそれぞれの方角に刻んであって、非常に有意義である。かすかな雪が上川市街の上空辺に浮んでゆっくり流れていた。

「ターン、パーン」 どろどろ発破の響が木霊し始めた。現場ではぐんと來る奴が他事みたいに可愛らしい音をたててている。十分程爽やかな大気にあてられ、晴々とした気分で北鎮岳を後にする。軽くなったリュックを肩にかけ、石室にも別れを告げた。昨日より道が悪くなり何度も軽びそうになる。危くセーフだったがT氏も思い切り足を滑らし、急々しそうに笑っていた。

下山は疲れない割に苦労する。九合目ワイシャツ一枚、弁当、反靴といった出立ちの一人の学生に会う。六合目、がさがさと熊みたいに出て來たのは、木炭担ぎの親爺。熊笹の炭俵を二つも背負っていた。次は物々しくキャンプの用意をしている四人組。

五合目、折角四合目という難関を越えて來た四人連れの家族が、一人の綺麗な娘さん故に引き返そうとしていた。サンダルを履いて頻をあからめている林子に無理とは思われたが、頂上の良さを話して励ました。

淡々登りつづけた林子達が六合目まで行けたかどうか

三合目、田舎者らしい男女の群がわいわい騒ぎながらやって來た。やがて一行は登山口まで元気に辿り着いた。檜の中の子熊や親子の鹿を見ていた有閑マダム連が珍らしげな視線を此方へ投げていた。事業所に着いたのは昼食時だったので、皆に登山の素晴らしかったことを多少の誇張をも混じえて宣伝した。すぐ温泉に浸って汗と疲労を洗い落した。汗ばみれの下着類を山奥には勿体ないような電気洗濯機に投げこむことも忘れない。

以上は大学生活初の夏休中、森閑とした層雲峡で暮した時の楽しい思い出の一つである。

日記帖の日附では八月二十二日から二十三日にかけての事となっている。

ずれ

金沢鉄二

高校二年を修了した三月、生まれてはじめて京都を訪れた私は、嵐山の裾を洗っては春霞の中に流れ去ってゆく桂川の水の中にしょんぼりつっ立って足を冷やしながら、「俺は異民族だなあ。」とつぶやいていた。

北海道は津軽海峡の沿岸に生れ、東風（マセ）、潮風の中で息吹きをしつつはぐくまれた私は、次から次へ、それからそれへと接する、京の所々を、すべて、〝荒らくれ漁夫の塩辛声と、長閑な京言葉〟〝箱根にごろごろと石をのっけに漁夫小屋と、古めかしくて地味りのする寺院〟 といった按配に、故郷の事物と対照させてみてはその鋭い対照像に驚いて、感嘆しながら、いつしか桂川の畔に佇んでいたのである。

京の街のそちこち、特に嵐山の辺りに漂う古風でみやびに雅田気が何か別世界の妖気のようにすら思われた。

〝伝統の美〟〝日本の美〟〝日本民族の美〟そんなつぶやきが、私の唇から、とぎれとぎれにこぼれ落ちてから、「俺は異民族だなあ。」という嘆声が生まれたのであった。

自分は日本文化の中に住んでいる日本民族である、と何の不思議もなく信じ込んでいた私が、はじめて日本民族の守り続けてきた本体の一端に触れてみて、嬉びの次に発した概嘆だった。自分が日本文化の中から〝ずれ〟たまま暮らしてきたことに気づいた時の概嘆だったのである。

★　★

ところが最近小樽に來た私は、又ぞろ〝ずれ〟を意識した。まず一つのずれは、函館と云う街が、北海道全体からずれているということ。景生達が、やれ滝川がどうの、砂川がどうの、と云っても私には、そんな町が一体どっちの方角に位置するのか、さっぱりピンと來なかったし、帯広の冬はマイナス三十度まで水銀柱が降下する等と聞いては、只々驚くばかりだった。私が一般常識に欠けていたのかもしれないが、そんなことを知らなくとも、別に何の不便もなく暮らせた程、私の住んでいた函館が道央からずれているのであろう。

★　★

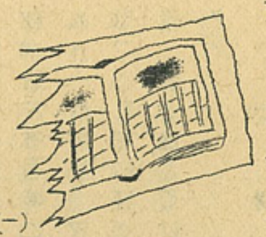
さてもう一つのずれは、矢張りこの小樽で、しかも我々の学園内で感じたずれなのである。このずれは先

の二つとは異なった性格のものであって、我々の人間としての权利に直接響いてくるずれなのである。

現在、我々の学園内には、教師員と生徒の親睦団体にる学友会こそあれ、学生の自治会がない。又教師員には組がない。大変なずれだと思う。終戦直后の民主化の波にのって、全国致るところに、組や自治会が誕生して以來十年近くを経に今日では、それが、やれ形態だけのものであったとか、やれ逆コースの波によって押潰されそうだとか、いろいろ論議されたり騒いだりしてひるのであるが、我々の学園では、最初から、そんな組や自治会というものが誕生しなかったのである。戦后の民主化の線から完全にずれたまま、我々の学園は今日を迎えたらしい。そして先の二つの場合は、私自身がずれに環境の中のずれに一貫であった。そして、ずれに環境はずれに私がずれを脱却しようとした時、何の妨害もしなかった。

ところが最后の場合、私は少しもずれていない。そして環境は、私にそのずれを強く強く押しつけて來る。しかし今更、ずれと妥協するわけにはいかないのだ。又、私が日本文化からずれようがずれまいが、函館という街が道央よりずれようがずれまいが、他の人々他の町々にとっては大した迷惑にもなるまいが、小構

商大という本道に於ける社会科学系の最高学府が民主々義の線からずれているということは学園外の観点に立ってみても、大いに問題なのではあるまいか。



(一)

日記について

寺本線宗

皆さんの中で、否、恐らく殆んどの人が、一度は日記をつけにことがあるだろうし、又現在書いている人もいるだろう。

日記についての経験のある人なられでも、今書いている人は殊更「今日は何を書こう。」と悩み又悩んでにちがいない。

案外、「俺は日記も書きつづけられない。余程根気がないのだなあ。」と思っている人、又「俺の日記はどうしてこんなにつまらないことしか書いていないのだろう。」と、なげいている人がいるかもしれない。このような人々のために私は興味ある随筆を紹介しようと思う。

これを読めば皆さんの悩みはとけ、これに同感するであろうと思う。作者は、A·A·MILNE で題名は「日記(ダイアリー)

の習慣」と云う。

(二)

先づ彼は、今日人が余り日記を書かない理由として次のように云っている。

I suppose this is the reason why diaries are so rarely kept nowadays — that nothing ever happens to anybody.

(今日人々の中に日記をつけることが、かくも甚だしく稀なる理由は、誰にとっても是非日記をつけねばならぬというような事件が滅多に起らないという一事である。)

この文章は、我身をかえり見てぴったり当てはまるのではないだろうか。

彼はつづけて云う。「若し次のように書きつづるならば、日記も毎日毎日書いて置く甲斐があるであろう。」と。即ち「今日も又壮快な一日であった。役所に行く途中、無頼漢二名を狙撃す。そこで余儀なく警察へ自分の名刺を出さねばならなかった。役所に着くや、その建物が火事を起しているので驚いた。然し幸くも英国瑞西両国間の秘密條約(註一)を取り出して、やっと類焼をまぬがれた。若しこの秘密條約が一般に露露されたら、戦争は確かに免れなかったであろう。昼飯に外食したが、その時ストランド街に逃げだした家があった。(註二)…」

註一、瑞西は永世中立国だから、他国と秘密條約は結ばない。こうじうところにこの随筆の面白さがある。

註二、ストランド街とはロンドンでも亜指の賑やかな町である。ここに象が出て來たら…

かくの如く、面白い例を彼はもう一つかいているが紙面の都合上省略する。

次じで彼は、我々の日記は至って面白くない散文的なもので、実にけだるいものであるとして、二三の例をあげている。

その例はこんなものだと思えばよい。

「昨日お祭りでチュウをのんだので、今朝は頭がいたく、床を離れたくなかった。サボろうと思って、同僚に出席カードをたのんだ。だが顔を洗うと気分もよくなったので学校へ行った。一時間目、英語：当分なければいいなあと思ったせいか、一頁程も訳させられた。昼飯、お茶はナット、ハエが一匹入っていた。午后マージャンをやって七十円もうけた。」

そして彼は一応結論する。こんな種類の日記をつけることが、今日段々と日記の頽廃しつつあるという意味ならば、大したことはないと。

「然し」と彼は云う。「その日に為したことを毎晩

正しく日記に記入するということは、少くとも一部の人々にとっては無邪気な楽しみだ」と。

例へば、我々が手帳をひっくりかえして、七月七日は開校記念日、などと知る類いである。我々にとって何時どんな授業がつぶれるかといふのは重要な問題である。

「これらは余り重要でないにしろが、まあそれ位が我々の日記にとって重要なところのものである。」とミルは言ふ。

(三)

作者は次いで曰く、

But there is another sort of dairy which can never be of any importance at all.

（然し少くも何の足しにもならないようなもう一つの種類の日記がある。）

この例として、「九時起床、下へ降りて行ったらメアリーから手紙が来ていた。本当に、愛している人の心なんてちっとも分らないものだ。外見情愛を装ってその仮面の下には、蛇の毒牙のような嫉妬の情が、自分達には分らないが、潜んでいるかもしれぬ。（以下救行省略）

朝飯を食べたが味もなく、心は遠くの方へ行っているのである。あゝ人生果して何ぞや？ 心内の宇宙について思して遂に昼食の時間となる。その后一時間ばかり横になって心を落つけた。今朝俺はメアリーのことを腹立しく思ったが、然し何とつきらぬことであったろう。俺はこの特前の性質を振り切って捨て去ることは出来ないのか。わが心内の高尚なる自我は、その達し得るところの自己を超越した崇高なる高い境地に昇り得ないのか。四時に起きて、メアリーに手紙を書いた。今日は精神的にすてきな日であった。」

即ち彼は、大多数の日記は肉体的方面には激動的な興奮が起らないので、自然現象や感情の方面に起ることはかり敍するから、この例の如く何の足しにもならぬつまらぬものになるのだといふのである。

(四)

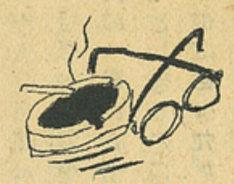
But, of course, there is ever within the breasts of all diarists the hope that there diaries may some day be revealed to the world.

（然しながら、勿論、凡て日記をつける人の心の中には自分の日記が何時かは世界に公けにされるといふ望みがある。）

とこの随筆の作者は言っている。即ち後世自分がえらくなれば、自敍伝の中に日記を引用したり、又全集の中に雑々日記、書簡集として発行されるといふ望みがあるというのである。

我々の前途は洋々としている。誰が有名な学者になり、実業家になるかは予測の限りではない。

さて皆さん、その日のために立派な日記をつけようではありませんか。



ニックネームについて

久松嘉一郎

私はこれから「ニックネーム」についての種々の考察を試みたいと思います。

先づ各国におけるニックネームについての定義を披露したいのです。御承知のように日本語では「綽名」といいますが、「綽」は、しとやか、しなやか、ゆるやかの意で、そこから推測しますと綽名は「しとやかなる名云々」となるでしょうが、所謂当事者間の親密感、而してしとやかなる雰囲気発生の原因となるべきものが綽名と解されるようです。少し大袈裟でありますが、綽名発生の技術上の問題はこゝにおいては全くみられなく、むしろ当事者間の意志の流れ、即ち技術以前に横たわる精神的な面が主となっているようです。少しく飛躍して申しますと、東洋的精神主義がここにもその片鱗を覗かしているのです。

次に日本の定義と対蹠して面白く思われますのは、英語を使用している国々のそれであります。成みにOODをみますと—

nick = 1. N notch serving as catch, guide, mark; 2. vt. hit upon, guess rightly, — nickname = name added to or substituted for or altered from the simple or regular name, (William the Conqueror : the Iron Duke)

この場合に明らかに云えますことは、前述の綽名に対しまして着しく技術的な解釈をしていることであります。むしろ綽名発生の種々のケースを述べておるような印象をうけます。プログマチズムと無理にこじつけにし気がします。

彼の場合も仲々興味しんしんになるものがあります。即ち nickname = nom de querre でそのいみは、芸名、筆名、綽名とあります。querre は、quérir の古語で「誘う、いざなう、呼び求める、さがしとる」と定義されています。当事者間の本能的衝動による行動が綽名発生の要因と解されるのです。そのいみにおいてて勿論「愛称」なるものが綽名の一種であるとされるのです。通俗的な綽名発生の要因を絞ってみますと、前述の如きはなはだ魅惑的な用語と化するのかもしれません。兎角仲々ブランス的であるようです。

さて独語においてはSpitznameでありますがSpitz＝鋭利な、辛辣な、皮肉な、の意でありますが、愛くの綽名はこのようないみを含んでいる事は大いに認められます。この場合の意味には、剛直で冷めたく手厳しい獅子の如く烈しい奇放なところがあります。相手に辛辣な言葉を浴せかけ自己の立場を護ろうとするナチス的な、又ゲルマン的冷ややかさがみられましょう。

このように各国における定義は、非常に異なったものでありますが、各々綽名の一面を的確に表現しています。このことを元にしてこれから綽名の分析を試みにひと思います。

一、先づ案外多くみられますのは、顔に関しての綽名のようです。顔全体の場合もありますし部分的なものに関する場合もあります。例へば「チンケシャ」なるものは、何んとなく小太がくしゃみをしたときのような賑やかな顔に似ているというのです。それを云う人は、親しみ易いほゝえましい気分を味うのですが綽名としましては軽妙な、やゝ感じの良いものです。その他に鼻の穴が大きく開いて下ぶくれの顔を河馬、猿面、馬等とこの部門に於ては枚挙にいとまなしです。

特異なものとしましては、ニキビについての綽名です。青春の象徴を一人占めしたような人を「噴火山」「やすワ」女性間においては「かんもどき」と顔の一時的な附属物に迄綽名は浸透するのです。又同じ対象物に対しても性別により、明瞭に異った綽名が発生するのです。

二、次に一般的と思われますものに、体の恰好又それから受けます感じを対象とするものです。

体全体が円みを帯び首が短く、イカツイ顔をしている人を「ダルマ」と云い、やはり肥えておりますが、顔色の余り勝れない人を「ウラナリ」と称します。

又身長に関係するものには、チビ、ノッポが通俗的ですが、歩く姿にクラゲ、ポーフラがあり、進化の神に反感を抱きたくなるようなものです。

面白いと思われますのは、映画、雑誌の主人公に酷似する故をもって発生する綽名です。「貴知子さんにそっくりね」などになりますと実に二重性を帯びてくるのです。

綽名として未だ確固たる地位をえていないものもありますが、この種のものは大低一時的突発的なものです。「黄公子然として嫌いだわ」「まるで坊ちゃんね」「あら、なんにも話してくれない、木石居士ね」等で、それっきりで終ってしまうのが大部分です。

三、いろいろな癖によるものもあります。勉強が昂じて奇癖になりつつある人を「生辞引」といったり、物事を考えるときにいつも指でとんとん机等を叩いたり

する人を「木槌」等がそれです。

実に卑猥な話ですが、ある放屁癖をもつと噂されていた人が「スカンクー」なる綽名を頂戴したのです。「奴の顔を見るとどうもスカンクを思い出すよ。そうくりだよ。」となりますと、綽名の対象が顔に飛出した効果になってしまい、命名者が罪の意識に駆られた位に漫延したのです。

四、或る特殊な状態の継続に対しても綽名は発生するようです。ガリガリ勉強する人を「ガリ勉」と称するのです。この才四の場合は特に相手に対する敵意や優越感を他の場合より露骨に押し出すものが多いように思われます。「ガリ勉」の場合もそうですが、勉強している人をみると必ず伏身を振り返り余り良い気分になれないものです。そこで「俺なんか遊んでても、ひとも前位の点数をとっているよ。何やってるんだろう。…」という風になって、相手への優越感を無理に作成して自己満足します。

特殊な状態の継続といえば、吉田首相が頻に浮びます。彼を「ワンマン」と称しておりますのは明らかに「ワンマン的存在」という異常な継続に対してでありますが、その底に流れております一つの感情は、一国の宰相を、ニックネームで呼べる気易い気持があると思われます。勿論アメリカ人が、アイゼンハウアーを「アイク」と呼ぶ感情とは違ったものですけれども…

その他に、酒を呑む少しく特殊な行動の継続に対しましては「グレンタイ」「ノミスケ」となり、歩きながら本を歩む奇癖の持ち主は「二ノ金」となってしまうのです。

なっきりどの門に分類されるのか明瞭でないものに「じょー大統領」や「長屋のおかみさん」に対して「あらー　おくさま…」といった風な呼び名に複雑な感情の入り混んでいる一種の存在です。前者の場合では大統領は大変な威厳感を味って呑屋に一緒につれてゆくことでしょうし、後者に於ては、どんぶり一杯のオカラを御馳走するでしょう。即ち御世辞、へつらいに似た感じが原動力となっているようです。

五、又氏名を縮少したり、それにほんの少し他の言葉を加えたりして出来上るものもあります。正子と呼ぶ近所の少女を「まあちゃん」良雄なる人には「よし坊」といった風になり、愛くの場合には綽名の俗性は消滅して愛称となるのであります。

これと稍々類似しているものに、恥業に関しての綽名より、むしろ「呼び名」があります。温厚篤実な和尚さんを「坊主」というのがそれであります。

今迄綽名に関して、身勝手なことを書いてきましたが、私の初めの意図を書き加えたいと思います。人々が種々他人を称するに綽名をもって用を足す場合が多いのですが、その綽名を少し分析することによって、その人の性格、職業、地位、又綽名当事者間の感情等が或る程度解るものでないでしょうか。

例へば私の引いた例においても「噴火山」「ガンモドキ」「スカング」等は、一見して学生であることは見当がつきます。それから親友間においてはそんな呼び方をしなく、むしろ本人とは余り直接の関係のない（同級生でもこれの内にきんで良いでしょう。）人でしょう。

「貴知子さんにそっくりね」「貴公子然としている」では、先づ独身の女性で、むしろ、ややミーハーの傾向を帯びている人々と思われます。職業は、昼飯時に映画の話で時間を忘れるサラリー・ガールの方が良い様です。人と会うと必ずその所で小声で批評を加える面白い性格の持主であると見当がつきます。

温厚篤実な和尚さんを「坊主」と好んで呼びたがる人は、終夜あくせくかくせく仕事に縛られています。他位は余り良い方とは思われず、言葉をよく正き変てにしたがる癖のある人でしょう。

綽名はこのように、それを口にする当人の気持にぴったりしたもので、又その対象物にも適切なものが綽名として本当でないかと思います。

人は、自分の興味ある対象物に目をとめますが、その上に、その対象物は、本人に適切な言葉をもって表現され、綽名はこの種類のものなのです。

「何を綽名の対象とし、又いかなる言葉となってそれが表現されるかによってその人間を把握できるのでないか。」を私の結論としたいと思います。

「CAOS」

かおす

— 塚田早苗

前言

以下は小生のメモの中、今年になって一番変化の多かったと思われる、五～六月—即ち、肺滲潤と診断され、又それが誤謬だったと判るまでの—約一ヶ月間のものの中、数個所を抽き出し、不適当な文句を削除する以外は、そのまま採録したものである。

五月十日

朝、かねて要心のため布団と敷布の間に入れておいた千円札を、出そうと思って手を入れたところなかった。愕然とした。これから月末までの小遣に予定していたたった一枚のものだ。でも、洋服やら寝台の下、帳面の中、スタンドの下等々探してる中に、あっさり諦めようかと、とも思った。三、四日前に、中庭で布団を干したっけ。庭に出た。ひどい雨に又風だ。傘の下から眼をたらせて、サーチライトが獲物を捜って大空を掃くように、紙クズしひものはないかと、さっと地面を一渡りなでてみた。溜の吹寄せられ相な、布団を干した近くの隅に行って見た。土台石のかけらや、木片の二十本も立てかけてあったその隅に、夢かと怪しむその札が、八重に折られ、雨風に打たれ、震へ戦いて居た。奇蹟だ。学校でアリや木っ葉ぢやないかなともう一度出して見て、よくよく確めて見た。感ションの害はうけざりしかと、喰もかいて見た。

教訓。物忘れする奴は、あまり要心深くしさぬこと。

五月十二日

「肺浸潤安静を要す」との通知をうけた時、全身の血が頭にたちたようになってクラクラとした。突如、越えられぬ壁につき当った感じだった。否、死を宣告されたように何とも筆舌に盡し難い気持がした。これからどこで、どうして生きよう。足をすくわれたようにヨロヨロと布団の上に倒れた。

絶対安静なら相当悪いに違いない。寮は出る。だが一体何処に行けば良いのだ。否、俺は生きる。断じて生きる。だが何をして牧入をえよう？　幸い貯金は二三ヶ月分ある。奨学金も加えれば十月頃迄は生とか生きれる。矢張り九月頃迄寮に置いて貰おう。迷惑は掛けぬようにやろう。その間専心養生しよう。冬は大敵だ。それでも治らぬものなら、勝ち九州の浜辺へ行こう。そして、バタヤでもしながら病を克服しよう。一人なら遮二無二生きられるぞ。母と妹が可愛想でなりぬ。俺が病気になったことを知れば老の身に鞭打って働くだろう。思うぬ。矢張り家には内密にしておこう。そして処々から丈夫でいる事情を、何らかの方法で報らせてやろう。除々に報らせることによって、悲しみに対する抵抗力をつけさせておこう。よし、兎に角最終的には誰にも迷惑をかけないように行動しよう。

五月十三日

悲観はきりのないものだ。前から用意は出来てるはずだ。報らされなかったにしろ戦后は俺なりに最善に生きて来たではないか。其事を幾度か確めたではないか。最后まで可能な限りを盡すのが人のなすべきこと

だ。俺は炎いの憑る度にそれを福に転じて來たちゃないか。二度も三度も拾った命だ。よし、強く、飽く迄も着實に、粘りぬいて生きるぞ。着実に、着実に、希望を捨てずに。何処かで生きれるぞと云う希望を。

肺を千切り捨てても生きるぞ。

五月十七日

俺は病気になれぬ。肺病になったら死ぬより手はないのだぞ。夢にも兄達の援助を頼むな。どうせ何にも出来ないのだ。心配させる丈のことだ。黙って居よう。絶対に肺病になれぬ。なるとしたら精神薄弱の故だ。今迄の労苦を想い出して見ろ、緊張していたから病気になどならなかったではないか。××、○○に居た時の事を想え、特にM書房に勤めていた時の辛の泣くに泣けない怖しい苦しみを覚えておけ。歩きやら寝たことを想え。收容所でも生きて來たではないか。何時も必死になって生命に縋りついていたのだ。今度も縋りつけ。何だ、今の生活等天国ぢゃないか。俺は病気ぢゃない。風邪なら吹飛ばせ!! 力だ、生命力だ。

少し滋養をやる、少しだ。

噛みしめよ。

こう書いて見たところで、何か空言めいた気がする。

阿呆!! 力を信ぜよ。己の内に息吹く生命の無を炎と為せ。

肺を焼け。巣喰う蟲を焼き盡せ。

五月二十日

永井荷風

ウマウマと暇の中で笑い乍ら原稿を書いて居たのか。或いは無意識的にはそうでなかったのか。皮を覆って笑っているお前の正体も、そのポストンを落すと同時に、冷い鬱口となって現われた。金儲を正当化する芸術性云々、この悪魔的云業に大衆は一も二もなく参る。

否今の世には価値の基準が、秩序がないのだ。価格も選択の指標にすぎぬ。それ自体の内在的意味はない。不安定な関係にすぎない。精神を疎外した資本主義文明、凡ゆるものを強引に量と価格に還元さずにはおかない暴力。逆巻く渦に巻き込まれ足掻く人間。価値の混乱、錯倒、欺瞞。事実がある丈、物が存在する丈、只それ丈のことだ。意味はない。

六月三日

体の調子は頗る良い。一と月前の事など夢みたいだ。浮気なものだ。

良い天候だ。全く。特に今は量の多方が好い。多力

天狗山に雨上りの薄雲が多く引いて、新鮮な木々の緑が、ボンヤリ濡れて光っている。

夕暮の毛無山の遠景も又素晴しい。内に躍動する生命を、カスミが軽く包んで睦らせている。判りきりした形、色、のもつ美しさは張りつめていて疲れた。嘘されに美こそ奥床しく、無限の深みがあって得も云はれず惹きつけられる。

疲れだ、余りにも疲れだ。実際には何もしてないのに気許り焦るのだ。追詰められている。落着を要する仕事に手がつかぬ。それで結局無為に過す。だから益々疲れになる。

六月十八日

又人の「気紛れ」について考へた。捉へ難い人間の本能について考へて見た。幾度か結論の出ないような考へ事は不経済だから止めようと思ったが、矢張り考へずには居れぬ。こう云う至験が度重なる毎に、本能のイメージも少し宛影を濃くして行くのだろう。

これで何日続いて悪夢を見たか。引揚以来殺されそうになる夢の連続ではないか。就眠と共に精神活動は停って黄じたい。どうして寄ってたかって心を追いつめ殺そうとするのだ。俺は何のためにこの責苦を受ける資格があるのか。不思議だ。

無意識的に抗い難い生活の圧迫、強迫感が影のようにコビりついているのだろうか。

それにしても、今朝の相手は日頃敬意を表している中共兵だった。港の倉庫の家根の上迫迫いつめられ、遂に見つかって銃を向けられた。引ずり落され足を縛られ波止場から海に投げ込まれにゃ眼が覚めた。廊下で小田さんが雑巾がけしていた。

"アプレは悪いことをしても悪いと思はない、罪の意識がない。" と或学者はアパンを代表して慨嘆した。

"私を含めて今の日本人には。と云へばよかったのにこの一云で彼は自分の不勉強を謂って了った。座談会に、講演にと忙しいんだろうけど彼の云業のもつ社会的影響力を考へると黙って居られない。この言葉は少くとも学者たる者の日から出るべきものではない。只日常の生活至験からなんとなく感じたものを云うのであればソコラのオヂさんと何ら変らない。根本的にはこの人のものの感じ方に学者としての資質に欠けるところがある。善い悪い、云業を変へて云へば罪の意識の有無、等と云うことは、その時の社会状態と照し合せて初めて云へるのであって一部宗教家の考へを除いては、何ら絶対的なものではない。人殺しさえ悪くない場合がある。死ぬか、生きるかに関する行為は

善悪の彼岸に於て考へられる。法律の云葉で云へば、〝生命の危機の前に、法は無力〟なのである。この、考へ方を悪用したのが先頃行はれた法相指揮権の発動＝会社といふ人の生命を守るための＝なのである。

贈賄した人は、果して自分の行為がどれ程悪いと思っているだろうか？　自分をこのような行為に駆りたてた仕組を考へ合せると、生命維持のためには、当然の行為だったであろうし従って指揮権の発動もむしろ当り前と思っているだろう。明に誤った考へに基いて罪を犯しているのに、彼らには罪の意識等ありはしないだろう。収賄者＝為政者＝の側に列っては道徳もなにもないようで私利を追うに汲々とし何等も誤魔化しと力で適当に解決しようとしている。法網を潜り抜け或は強引に押し曲げて、寄ってたかって国民を食いものにしている。無理が通って道理が除け、寿子を泡へに大人は喪じものに巻かれている。良くも悪くも動けないで色々の事情により只死ねないが故に何となく生きている、と云った感じの人が多い。政治は悪く、道徳は頽れ、人口は過剰で互に失めき合い街に溢れている。だから何処かで大量に人が死んでも、だからと云って、直接自分の身に響かぬ種類のものなら、まさか人の手前顔色に慌しがると云うことはなくとも、心の奥では〝悪くない〟位にしか考へない。こう云うことは判然と書くものじゃない、実に本当のことを、他人の身空を案じて、云った許りに、冷血動物扱いにし後で二度と立ち上れないほど、手ひどい仕打をする人がいるのだ。食うために、出世するために。

だが株をもっている人は国外のどこかで小競り合位の慢性的紛争＝断っておくが僕は共産主義者じゃない。彼らは人殺しと云う生のままで感じるには余りにも博愛的であり、紛争と云うような云葉のオブラートで包んで自らを誤まり化している＝が起るのを首を長くして望んでいるし、就職難の学生も食うためには、自衛の名の下に、重工業産業が活況を呈して来るのを期待している者が居る。

土台こう云う混沌とした社会で眼を血走らせて、落すまいと必死になって命を抱え込んでいるのが大衆だ。

青年は瞳孔の自由を与へられている。眼許りピカピカ光らせるが希望の光は一筋も見えない。一寸躓けばもう駄目だ。常に薄氷を踏む思い。その切迫感は贈賄者の比ではあるまい。極端に云へば社会全体が善意の彼岸にあるようなものだ。この常規を逸した社会に、さきの学者は、昔著していたヨレヨレの、袖も通らないチャンチャンコを着せようとしている。

我々の社会＝より物質の為の生活を営む＝では人は行為の至済的意味に於て道徳的意味を意図するように

なっている。精神的なものを物質的なものに反射させ還元して、つまり物質によって精神を計量、判断しようとする。へ夸でて科学的な精神の頽れである。つまり物質の論理が精神の論理を支配すると云う一見怖しい錯倒が、この社会のもにねばならぬ必然的性格なのであろう。精神の側から見ると、突拍子もないことが起るわけである。しかし何が正しく、何が悪いのかを、この手探りの生活の中で既成観念に捉はれず、日常の個々の体験から自らの力で考へて行こうと、時に躓き時に立停り欠らも、真剣に善悪に歩んでいるのがむしろ我々アプレの姿ではなかろうか。血と汗で創り上げられて行く来るべき倫理こそ、始めて力ある、生きた倫理となるであろう。

誰だ、横で笑ってる奴は。

後記

たゞに一部宗教家等を除いては、善悪に絶対的なものはないと述べたが、これに関連して私の〝世界は割合である〟と云う考へ方について一言述べておこう。

これに従えば凡て世の中の現象は質と量の組合せによってそれ自体として生起するのである。もし細く云へば如何なる種類の質のどれとどれが相互に如何なる割合で結合しているか、と云うことである。そして現象の解釈に当ってはそれらのものが解釈される可き物、次元にが於て解かれるのである。この私の考へ方はそれ自体論理的矛盾を含んで居り命題として設定され得ないように見えるが土台、理論的に矛盾している社会を統括する観念体系も論理的に完全でありえないのである。今迄多くの哲学は論理的に完全無欠ならんとしたために無理をし実実より遠ざかり、観念の遊戯と化し果ては衰微するに到ったのである。今のところ私のこの考へは、未だ日頃の思索体験から漠然と割り出された感じの域を脱せずとても体系化等と云うところ迄行ってないが考へへの繰り次ぎ就れ機会を見て発表する予定である。この相対的、量的、考へ方こそ資本主義文明の毒すべき浅薄、軽便な物質的、機械的世界観と考へられるかもしれない。この拙文は最初善悪、罪の意転、の問題を私のこの考え方に基いて小説の中で展開させようと思った。筋は一人の貧しい学生が、近所に住む矢張り一人者の見掛は貧しく蟲のような生活をしているが実際は可成りの現金をもっている老人、を明らかな殺意はないのだが抵抗し難いショットした体自身の動きによって死に到らしめる。それが原因で牢に入り自己の行為を反省してみる。と云うものであったが書いてる中に罪と罰、高瀬舟の事等が頭に入って来てどうしても引ずり込まれて了って書けなくなった。

日本經濟の成長率と人口問題

二十八年度卒業　笠原緊三

(一) 日本經濟の特質
(二) 成長率について
(三) 日本の場合
(四) 問題の所在

(一)

あにかも季節はずれ　開花し、結んだ果実が、成長しきらぬうちに熟してしまった様な、先進資本主義国と後進国の各々の悩みを同時に受けねばならぬという有難くない特質をもつのが日本經濟の縮図と云えよう。

すなわち、一方において原始的農法が日本經濟の特質を形成する反面、他方では資本の蓄積こそ小であれ著しく独占的な形態を有する工業部門が少なくない。そしてそれらの中間には弱体な中小企業が無視しえぬ地位を占めている。全体の經済は資本蓄積のための貯蓄を必要とするにもかかわらず、消費需要の減少は即座に大企業及び中小企業に波及し、先進国的な悩みをうけるのである。

これを人口の問題について見るならば、原始的農法は労働が唯一の生産手段であり、この意味で農村の人口は急増の一途を辿ったのである。かくてその生れ出ずる子供が親のもとで耕作の補助を行う場合には問題が起らぬが、その子供が生長し、独立する年齢に達した場合、長男のみが家業を受け継ぎ、次男以下は農村で職を失い、都市に出て、あらゆる機会に賃金の上昇を阻む要因となるであろう。近代的大企業、封建的な中小企業、原始的農法、過剰人口のプール、これらが日本經済の特質を形成するものと云へよう。

明治維新以来、国家の保護を受けて来たとは云へ、他国に類を見ない高度の成長率、拡大貿易の裏面にかかる特質が存在していたことを忘れてはならない。かかる人口がわが国の經済の成長率とどの様な関連をもっていたかを省み、それを以て本稿のさゝやかな目的としたい。

(二)

先づ、經済の成長率なる概念を明らかにしなければならない。もともと經済的成長率の概念はR・F・ハロッドによって定式化されたのであるが、それは

$GC = S$　なる式を以て表わされるのであろう。(註1)

この場合Gは成長率、Cは資本係数、Sは貯蓄率を示している。これを人口と生活水準と面かわ特質づけてみよう。もともと成長率は実質国民所得の成長を以て表わすのが常であるが、実質国民所得の成長は、更に生活水準と人口の増加とに分解して考えることができる。Zが人口の増加率、Yが生活水準の増加率を示すものとすれば、このことは

$$G = Z + Y$$

なる式を以て表わしうるであろう。(註2)　この式の意味するところによれば、先に述べた如く国民所得の成長率は人口の増加と生活水準の上昇とに分解され、高度の成長率が存在しても人口の増加率が極めて高い場合、生活水準の向上率はそれによって犠牲にされることを意味するであろう。

次に成長率と貯蓄率との関係について吟味しよう。こゝでは当然資本係数の概念を使用する必要が生じて来る。資本係数は特定期間の使用資本額と所得との比率であるから、所得をY、資本額をKで表わすとなる資本係数Cは、K/Y　で示され、もし二つの連続した期間の資本係数が変化しないものとすれば、

$$K_1 = KY_1 = C$$

と看做すことができる。又新たなる資本額は$K_1 - K_0$に相当し、貯蓄率Sはその蓄積額と国民所得との比率であるから

$$S = \frac{K_1 - K_0}{Y_0}$$

となる。この式の分子の値を変化しないように次の如く書きかえることができる。すなわち

$$S = \frac{\frac{K_1}{Y_1} Y_1 - \frac{K_0}{Y_0} Y_0}{Y_0}$$

この式に　$\frac{K_1}{Y_1} = \frac{K_0}{Y_0} = C$　を代入すれば、

$$S = C \cdot \frac{Y_1 - Y_0}{Y_0}$$

となる。$Y_1 - Y_0 / Y_0$は成長率Gを意味するから、前に述べた　$GC = S$　の式が得られ、Gは先に述べたように　$Z + Y$　であるから

$$Z + Y = \frac{S}{C}$$

なる関係を知ることができる。この式をもとにして日本經済の成長率の特質を検討しなければならない。

(註1) R·F·Harrod; Towards a Dynamic Economics, 1948.

（註2） この式の成立過程は都留重人氏によって次の様に解説される。（「日本経済の分析」都留重人・大川一司編、一九五三年九月、勁草書房）。

即ち生活水準は一人当の国民所得を示すから人口をN、国民所得をYとすれば、生活水準はY/Nで表わされるであろう。そこで次の三式を考えよう。

$$G = \frac{Y_1 - Y_0}{Y_0} \qquad (1)$$

$$x = \frac{N_1 - N_0}{N_0} \qquad (2)$$

$$y = \frac{\frac{Y_1}{N_1} - \frac{Y_0}{N_0}}{\frac{Y_0}{N_0}} \qquad (3)$$

これらによりGは国民所得の成長率、xは人口の増加率、yは生活水準の向上率を示すことを知るであろう。これらには互に必然的な関連がある。それを明らかにするために便宜上 $Y_1/Y_0 = m$ 、$N_1/N_0 = n$ と置くと次の式が得られる。

$$G = \frac{Y_1 - Y_0}{Y_0} = m - 1 \qquad (1)'$$

$$x = \frac{N_1 - N_0}{N_0} = n - 1 \qquad (2)'$$

$$y = \frac{\frac{Y_1}{N_1} - \frac{Y_0}{N_0}}{\frac{Y_0}{N_0}} = \frac{\frac{Y_1}{N_1} \cdot \frac{N_0}{Y_0} - 1}{1} = \frac{m}{n} - 1 \qquad (3)'$$

(2)'と(3)'によりnを消去すれば

$$(x+1)(y+1) = m$$

となり、(1)によりmを消去すれば

$$G = x + y + xy$$

がえられる。

xyの項は百分率と百分率との積であり、極めて小となるから実際には無視しうるであろう。従って問題の時系を把握するには

の式を以てしても差つかえないものと考えられるのである。

（三）

大川一司氏の資料によると、（註1）日本経済の成長率は一八七〇年以来ほぼ三%と五%の間を前后してきたものと考えられるが、この数字に誤がないとすれば国際的に最も高い成長率を示してきたこととなる。この高度な生長率は、資本係数がほぼ国際水準に近いとして、相当な貯蓄率を前提としなければならない。

われわれが消費性向の安定性を認めるならば、日本国民のみが他国民に比して、少ない所得にもかゝわらず特に一般の消費性向が低いという理由は何処にも見当らぬであろう。とすれば自主経済の貯蓄率がきわめて高かったにという事実に対し、何らか他の解答が用意

されねばならぬ。それには次の二要因が先ず考えられるであろう。

(1) 持続的な物価の騰貴

(2) 所得分布の偏在

これらの各々について簡単に検討しよう。

(1) 持続的な物価騰貴

持続的物価の騰貴が高度の貯蓄率を実現する理由は物価と賃金との鋏状価格差によって説明できるであろう。賃金の騰貴は物価の騰貴に遅れを示すのが常であるから、インフレーションは国民の大半を占る給与所得者の消費を強制的に抑制することとなるのであり、この場合の貯蓄は一種の強制貯蓄である。

わが国において一九二〇年乃至三二年の物価下降期を除けば、物価は殆んど上昇趨勢を示し、第二次大戦前で、物価は一八七〇年の凡そ五倍の水準になっていることなど注目すべきであろう。かくてわが国の高度の貯蓄率もかかるところに一つの原因のあることを忘れてはならない。

(2) 所得分布の偏在

所得の分布が極端にかたよっている場合、当然考えられることは高度の貯蓄率である。すなわち低位所得者は殆ど消費性向が百%に近いにもかかわらず、低位所得者の所得総計は、国民所得に対し少ない部分より占めていない故に、少数ではあるが国民所得の夥くの部分を受取る高額所得者の消費性向が低いならば、全体としての消費性向は低位に抑えられ、全体として高い貯蓄率が実現するのである。

わが国の場合、少なくとも工業生産部門において、資本蓄積が高まり労働の生産性が上昇するにつれて、剰余価値率が高まっていることは見逃しえぬ事実である。（註2） 二つの事は、労働の生産性が向上してもその割合に給与所得が増せぬことを示すと考へられるであろう。

以上日本経済の高度な成長率の前提となっに大きな貯蓄率の原因について簡単に考察したのであるが、かくも高度な貯蓄率をカヴァーする程の投資誘因が何処にあったかとの問に対してここで検討することは省き唯、発展途上の稀少な資本設備と度重なる戦争とが投資誘因となったことを指摘するに止めよう。

次に、日本経済の異常な貯蓄率について、インフレーションと所得分布の偏在にを挙げたのであるが、人口の問題と関連して重要なのは所得の偏在であり、日本経済を他の国と区別して著しく特徴づけているのが特殊な人口問題に他ならない。そこでインフレーショ

ンの問題は貯蓄率を高度に保つ一要因であることを示すに止め、以下人口と成長率の問題を追求し、その相互関係を探ってみよう。

（註1）「日本経済の分析」（前掲書）三〇七頁　第三表参照
（註2）前掲書、二八六頁　第五表　工業の剰余価値率（昭和三年平均）参照

（四）

経済の成長率は人口の増加率と所得水準の上昇率とに分解されることは先に式によって示したところであるが、成長率が如何に急速であっても人口の増加率が同様に急速であったならば、生活水準の向上はあまり期待できぬであろう。わが国の場合はほぼそれに近い状態にあったと考えられる。然らば日本において、人口の増加率がそれ程大きくなかったならば、生活水準はもっと大巾に上昇していたであろうか。事実と逆の仮定をたて推測することは困難且つ危険であろうが、少なくとも次のことが云えるのではないか。すなわち、もし人口の増率が大きくなかったならば、これ程大きな成長率は実現しなかったであろうと。逆に云えば、生活水準の向上は人口の増加によって或る程度犠牲にはなったものの、人口の急速な増加がこれ程大きな成長率を実現せしめたのであろう。

と云うのは、人口の急速なる増加は実質賃金の上昇を阻み、所得の分配を極端にかたよらせ、大きな貯蓄率を可能ならしめたと考えられるからである。又、大企業においては資本蓄積の高度化と共に労働の生産性及び剰余価値率は急速に上昇し、生産費の低下によって国際市場に進出し、国際収支の面からも経済の成長を促進したのである。

かかる賃金上昇を阻止する要因となった過剰人口の供給源が農村にあったとすれば、農村の原始的農法が皮肉にも近代的大企業の育成に役立ったと云えよう。それぱかりではない。かかる過剰人口のプールは機械を購入するよりも労働力を購入する方が安いと考える中小企業へも惜しみなく労働力を提供し、この面ではむしろ中小企業の合理化を阻んだ結果をも生じたのである。

かくてわが国の経済の成長率を考える場合、その基底を形成する農業と過剰人口のメカニズムを除外してはその特質を捉えることができないであろう。農村問題、それは見逃されぬ大、しかも重要な問題なのではなかろうか。

このつたない稿もどうやら問題の提起に終ったようである。

―以　上―

民族解放運動に思う

―清水彦三―

以下に示す文は、私が平素なんとなくそうであると思っているそのなんとなくを文章にしたものである。充分に勉強するひまもなかったので思わぬ間違いもあるだろうし、又根本的に間違った考え方をしているかも知れないが、その点は了承していただきたい。ざっと笑読願えればそれで結構なのである。

（一）

今日（七月二十一日）の新聞を開いてみる。政治面にはインドシナ戦線の休戦を報じている。東南アジアよりフランス帝国主義が一歩後退しはじめている。漸くアジア諸民族の解放運動が軌道に乗りはじめている。世界はアジアを中心に大きく動いている。次に三面記事をみると、米国の科学者、A・B・B・Cのロバート・W・ミューラー、R・ウッドベリ博士と日本の長沢佳熊教授とが、日本の使用しているガイガー計数管について論議しているのがある。私はどちらが正しいか知る由もない。そんなことはどうでもよいことである。ビキニに於ける実験以来四ヶ月も経ているのである。今になって日本の科学者が使っているガイガー管が科学的批判に耐え得ないとし、今迄日本側が発表してきた放射能に対する研究を全く無価値とするのはアメリカ側の無責任な一方的なやり方である。何故今迄四ヶ月もの間に日本の科学者と協力してこの問題に当らなかったのか。こっちの方がむしろ大切である。

ビキニに於ける水爆実験程近頃の世論をわかしたものはないであろう。所謂「死の灰」事件として日本全国を大騒きさせ、恐怖のどん底におとし入れたのである。それ以来、日米関係はますます悪化の一途を辿っている。ビキニの実験と云い、その后アメリカ科学者達のとっている態度といい、そこには少しも日本を、否アジアを理解しようとする誠意が見られず、むしろ上からのおさえつけ、圧迫のみが感じられる。又日本国民のふっとうしたに世論にも全然耳を傾けず、水爆実験に対するいささかの反省も見られず、あまつさえ、水爆実験を今后とも続行すると公言しているのである。

何が米国をしてかような態度をとらせるのであろうか。米国側はソ連でも水爆実験をはじめているので米国だけがそれを止める訳にはいかないと云っている。

それも一応の理由であるが、そうかと云って被爆地に住む人々の命をかえりみないで、否アジア人全体の

命をかえりみないで、水爆実験を太平洋の真中でやってもよいという理由にはならない。どうしても実験をやりたいのなら米国領土内でやってもらいたいものだ。

共産側と米国側の対立という問題もあるけれど、私はここではそれを才二義的なものとして、もっと根本的な問題を追求したい。先づ才一に挙げられることは人種的差別問題である。白人種の有色人種への優越感、具体的に、ヨーロッパ人種のアジア人種への優越感である。アジア人を野蛮人とみるヨーロッパ人の偏見が、今の水爆実験、インドシナに於けるフランスの「偉大なるフランス」の再現に対する執着にあらわれている。才二に挙げられるものとして、米国が独立したはずの日本をその植民地、隷属国としてしか見ていないということである。

日本全国にある米軍基地、日本の領空領海をわがもの顔に使用している米國の態度から、この事実は明瞭である。これらの二つのことを考慮に入れると、米國の日本に対してとっている否、アジア全体に対してとっている政策は容易に理解される。

（三）

人種的偏見の問題は国際関係を論ずる場合に、いっも大して顧慮されなかったように思う。西欧諸国のかつての東洋に於ける植民地政策は、この関係なしでは到底理解できないものである。この人種的差別感情は人間の美的感覚を通しての心理状態からきていると思はれる。全世界に人種的差別の消える日は永久に来ないのかもしれない。現に自由平等を謳歌している米国に於ても人種的偏見は根強く存在している。もっとも昨今これらの差別待遇は法令をもって禁止されてはいる。しかしこれによって表面上の差別はなくなるかも知れないが、内面的、心理的には半永久的にその解決をみないだろう。異った人種が一つの国家を形成している場合にはこれらの人種間の関係は国際的にあらわわないが、各人種が互いに異った民族、国家を形成している場合には、例へば黄色人種の一つである大和民族が日本という国家を作っている場合と白色人種であるアングロサクソン、ラテン系がその支配权力を保持している米国との場合には、これらの人種的差別が国際的にあらわれてくる場合である。同様に、西欧諸国のアジア諸国に対する場合も然りである。水爆実験、日米科学者間の論争、内灘事件等々にはこれらの要素が多分に入っていると思われる。私はいまだに、あの水爆実験当時の米国に対する憤りをたれることが出来ない。私はニュース映画に映る尊い犠牲者が、貧弱な医療設備しかない、それも日本では最高の東大病院に

全幅の信頼をおいて遂はれて行った姿に思わず涙した。

アメリカの民間からではあるが、ヤケドの薬であるワボランの薬から作った軟こう状の薬が送られて来た事実は苦笑の中に闇にほうむられたが、あの些細な事実が実はアメリカの民衆の日本に対する感情をもっとも如実に語っている。あの薬が民間から送られたことが特に重要であると思う。日本を、日本人を、東洋の一野蛮人としか見ていないアメリカの鼻持ちならない優越感を、この事実によってはっきりと知らされたのである。アメリカと日本、白色人種と黄色人種の間には解決困難な大きな溝がよこたわっているようである。

この人種的対立は、民族的、国家的対立、人種的対立と一致する例が沢山あるしよりもはるかに解決の困難な問題である。この問題は決して一時的なものでなく、超長期的問題である。我々はつい忘れがちなこの根本的問題を見落してはならない。

次に考えてみたいのはアメリカのアジア、殊に日本に於けるファシズムということである。日本が経済的にも軍事的にも、全くアメリカの植民地的性格をおびているということである。これは例のMSA協定によって益々鮮明になった。MSA援助による自衛隊の発足は日本がアメリカのアヤツリ人形であることを如実に見せはじめた。私は再軍備については必ずしも反対ではないのであるが、（むしろ独立国は当然、対外的にカのバランスを保持するために自衛隊を必要とすることを認めている。）しかしその軍隊が外国の援助のもとに成立した、所謂ひもつきの軍隊であることにがまんが出来ないのである。なるほど、わが国の現在の経済力をもってしては到底軍隊をつくる余裕はないであろう。しかし出来ないからといってアメリカの援助で軍隊をつくることは、かってのフランスのブルジョアのように、自己の利益に目がくらみ外国に母国を売ることになりかねない。現在アメリカは、アジアにおいてかってのイギリス、ドイツ、フランス、オランダが果してきた役割を一身に背負っている。即ち、自国の商品市場開拓のためにアジアにネオファシズムを発展させ、或いはアメリカ帝国主義を伸張しているように思われるのである。日本が真に世界の平和に貢献する国家になるためには、アメリカ帝国主義の手先となっている現在の状態から脱却し、みずからの正しい道を歩ぶより他にない。私はなにもアメリカの支配から離れてソ連の手下になれというのではない。確かに現在は共産側とアメリカを中心とする自由民主諸国家郡とに別れている。しかし現在のアメリカはなる程民主勢力の主体となっているが、その地位はだんだん変化していることも見逃してはならない。フランス、イギ

リスがアメリカから離反する度合が強ければ強いほどアメリカは日本抱込みに狂奔し、近頃の「日本株上る」の状態を招いている。アメリカが親米一辺倒の吉田自由党をつよく支持していることも、この事実から良くわかる。私はここで民族解放問題に入ることによって日本の進むべき道を見出したいと思う。民族が眞にその意識を正史上にあらわしはじめたのは極めて最近のことである。それは資本主義の発達と深い関係がある。資本主義の発達は今までの封建的社会機構を崩壊に導き、自給自足の地方分权制度は、中央集权の形態となり、資本の介在、交通機関の発達、言語の統一によって同じ経済機構の中に国民が生活するようになった。

こうして一国、一民族が形成されたのである。ここで重要なのは民族と資本との関係である。この関係を無視しては到底植民地問題を解明することは出来ないであろう。資本主義の発達により、貪欲なブルジョアジーは私利追求のためにその商品市場を開拓する必要にせまられ、海外に植民地を求めた。そしてこれが帝国主義と結びつき帝国主義国間に植民地爭奪戦が展開された。わが国もこの海外市場獲得競爭に参加したが、このような植民地をもつことは国内の労働者を益々不当に搾取する結果となり、従って労働者がみずからの生活水準を向上させるためには海外の植民地を解放することが必要であった。

かくして労働者解放運動が植民地解放運動と展開する。東亜に於ける帝国主義は日本の敗退によって消え去ったように見えたが、かつての植民地の主人である西欧諸国はその有利な地位を確保しようとしたので植民地問題は再びふり出しに戻ったかに見えた。しかしオニ次大戦の結果、民族解放運動が活潑になり、不完全ながらもインド、インドネシア、フィリッピンなどが独立した。インドシナはフランス連合軍の敗退により完全独立の日も近い。このようにイギリス、フランスなどがアジアから勢力を失いつつある時に、その勢力を伸張してきたのがアメリカである。アメリカのネオファシズムがイギリス、フランスのそれにとって代りつつある。アメリカの資本がアジアを支配せんとしている。ヴェトナムに於けるフランスの失敗だけを笑ってはおられないのである。西欧諸国はアジアをいい加減に理解しているように。アジア諸国に民族解放の機運が除々にではあるが、確実に進展していることに目をふさぎ、昔日の夢の再現を希っていたところに誤算があったと云わねばならぬ。アジア諸国は着々と西欧の桎梏から脱却しつつある。日本をはじめアジア諸国がアメリカのネオファシズムから解放されるためには、各国の労働者が団結しなければならないことは

今迄述べてきたことからして容易に判断できよう。ブルジョアジーよる民族解放は帝国主義の再現を招くおそれが充分にある。現在の日本はこの危険な道程を辿りつつある。我々は現実を正しく認識して判断をあやまってはならぬ。

(三)

民族解放の問題はかくして理解され、一應の解答は与えられたのであるが、人種的解放の問題（各人種間の偏見を抹殺することを特にこう呼んでおく。）は内面的、心理的な複雑な問題であるのでその解決は容易でない。結局人間の倫理感に訴えるより外はないが、それでもなほ不完全である。たとえ全世界の国々が外面的に完全に平等であり、平和であったとしても、この人種的解放がなされなければ眞の平和とは云えない。

民族解放、人種的解放の両問題は、縦糸と横糸の関係にある。縦糸は遅々としてではあるが着実に出来つつあるが、横糸は錯綜していて容易には出来上らない。眞の世界平和は、民族解放の縦糸と人種的解放の横糸とが完全に出来上って、はじめて完成するのである。

—以上—

『マルクスの失業感』

—翻訳—ジョン・ロビンスン著—

エコノミック・ジャーナル（一九四一）より

田村美夫

マルクス主義経済学者と学術経済学者との関係は近年変化して来た。マーシャルの時代には未だ通ることのできない深淵が彼らを分離していた。一方の側は資本家体制の悪徳をあばくことにつとめ、他方はそれを快い光で飾ろうとつとめた。前者はこの体制を、それ自分のうちに崩壊の萌芽をもつところの過ぎ去って行く歴史的な一面として考え、後者はこの体制を永久的なそして論理的にも必然なるものとして考えた。この外観の根本的な相違は言葉の相違によって支持せられどちらの側も自分等自身の観点によって濃く色づけら

れた術語を用いた。かくて学術派は資本所有によって得た利子を節制又は待つことの報酬として、そして利潤を企業の報酬として評価したが、一方マルクスは無給労働、又は剰余価値（労働に支払われた価値以上の労働によって生産されに価値の剰余）として利子や利潤（それに地代）を表わしている。このような態度の完全な相違は、此の二つの学派間の相互の交通を不可能ならしめたのである。

近年学術派達は大低著しい変化を経験した。時代の情況は、彼らに独占と失業という二つの問題に注意を集中させる事を余儀なくさせた。そしてこの二つの問題は果して全てが凡ゆる可能な経済体制のうちの申し分のない形で最善の方向へ進んでいるかどうかという疑いを必然的に提起した。そこで彼らは資本主義の長所に眼をとめるよりはむしろその欠陥を分析することによりー層心を傾けるようになった。単に資本を所有すること（待つこと）を生産活動として説明しようとする試みは放棄された。そして資本そのものを生産要因として扱うことは、歩くことを労働として扱うのと同じように誤っていると云う考え方が段々と勢力を得て来た。「労働は技術、自然的資源、資本設備及び有効需要の一定の環境のもとにおいて作用する単一の生産要因とみることが好きしい。」更に重要な事はもはや資本主義は永久に必要なものとは考えられなくなったことである。かくてケインズ氏は次のように書いている。

「私は資本主義の利子生活者的な側面を、それがその仕事をなし終ると共に消失すべき過渡的な局面として見るのである。」更にヒックス教授は

「資本主義体制（投資を維持するに充分強力である企業者新機軸の傾向のない）の如きものの長い余命を当てにすることが出来るとは私には思えない……恐らく過去二百年間の産業革命全体が、巨大な長期的ブームに他ならなかったにという考えはこれを押へる事は出来ない。」と書いている。

これらの証明はマーシャルに見出しうるどれよりもはるかにマルクスに近い、又一方カレッキーの警句、『投資の悲劇はそれが有用なるために恐慌を惹起するということである。』はマルクスと密接な類似性をもっている、『資本家生産の真の障害は資本そのものである。』

それ故に言葉の上の深刻の橋渡しをすべく時は熟したように思われる。そしてこの論文における私の目的は、学術経済学者にわかり易い言葉をもってすると『失業』についてのマルクスの分析のありのまゝについて私が感ずることを吟味することである。

最初に我々は用語についての若干の点を扱わなければならない。マルクスの体系に於ては商品の価格は一般に（C＋V＋S）から成り立つ。（Cは不変資本）は固定資本の消耗と減価であり、Vは可変資本）は賃金Sは余剰価値）は利潤と利子である。（Sは又地代も含むが、これは複雑であり、この研究では無視することにする。）。一定ストックの資本と一定の技術のもとでは、生産高は雇傭に比例する。それ故に生産高一単位当りの賃金費用は効率と相並んで一定であり、そして短期の限界費用は平均原始費用に等しい、それ故にありふれた逆L字型の短期の費用曲線をマルクスの分析にとり入れることが出来る。

（CとSは産庫の一単位当りについて計算される。しかし一人時間当りの生産高は短期においては一定であるから、それはT度生産高一単位当りについても計算されうることとなる。全ての商品の平均に於ける価格はその時（（C＋V＋S）／（T時間））に等しい。

マルクスの概念の鍵である搾取率（S／V）は純利益と利子との賃金手形に対する比率である。それは利潤部分又は価格の原始費用に対する割合（カレッキー氏の云う「独占度」）と同じことではない。これに到達するためには我々は先ずCを減価と原材料費用とに、分解しなければならない。それとも、寧ろそれよりもよいと思われるが、原材料が次々と出て来るところの閉鎖された体制を仮定しなければならない。その時Cは減価であり、生産高一単位当りの総利益は（S＋C）／V となり、その時一人当りの生産高は一定である。

マルクスは資本の利潤率を S／（C＋V）として表す。しかしそれを此の形に表すためには最初にCを資本の貯蔵率に転形することが必要であり、そしてマルクスが提言する如く、産庫される資本と消費される資本とを弁別する必要がある。これは固定設備の一定の収益率（又は存続の長さ）を想定することによってなされる。その収益率は単に技術的な条件によって支配されると考えられる。固定資本のストックはその時、Cに於ける減価要素の一定の購買数である。そして S／（C＋V）は資本の収益率の指標となる。

さて我々は今何が産庫の量と実質賃金率を決定するかを考慮しなければならない。資本論第一巻の初めの方で、マルクスはセイの法則を否定している。「販売はいずれも購買であり、また購買はいずれも販売であるから、商品流通は諸販売と諸購買との必然的な均衡を制約するのだ、というドグマ程馬鹿馬鹿しいものはありえない、もしそれが、現実に行われる販売の数は現実に行われる購買の数に等しいということを意味す

るのであれば、それは平凡な同義反復である。だがそれは、販売者は彼自身の購買者を市場につれて行くのだという。……他の人が購買しないでは誰も販売することは出来ない。だが誰も彼自身がすでに販売しにからとして、すぐに購買する必要はない。……もし販売と購買との間の裂目があまり甚しくなると、それらの間の密接な結合即ち統一が恐慌を通して暴力的に自己を主張する。」これは有効需要不足の点から恐慌理論の登場を約束する。しかし「資本論」の第一巻、第二巻は決して完成されたものではなく、只マルクスの死后エンゲルスによって出版されに覚書や未完遺稿の中にしかにしてこの理論は組み立てられるべきであったかについてのヒントが散見されるにすぎない。一方マルクスは有効需要の問題を除外するという仮定に基いた彼の議論を発展させた。彼は時々お互い貸し合う資本家について説くことがあるが、恢して彼は、自分の貯蓄を自分の事業に投資するような資本家企業家について考えるのである。資本家は蓄積することのために蓄積するのであり、そして利子率は資本構成の統制にも、投資誘因への影響にも共に何ら役割を果さない。それは単に高利率が不正利得の中の一つの役割を果すメカニズムにすぎない。資本家は彼らの利益のため彼らが消費しない部分は全て投資する。かくてマルクスの仮定によると有効需要の問題は生じず、そして資本の蓄積率は利潤からの貯蓄率によって支配されるのである。資本の生産効率は技術的な条件によって与へられ、資本は効率に用いられる。よっていかなる時でも雇傭の量はその時存在する資本の量によって単独に定められ、資本が蓄積されるに従って雇傭は増大するのである。

もし雇傭量がその時の資本貯蔵量によって決定されるのであれば、実質賃金率は階級としての資本家と階級としての労働者の間の契約上の力によってきめられる。雇傭を求める労働者は、常態では資本によって提供されに雇傭量を超過する。従って労働者の契約上の地位はきわめて弱いものとなる。生活賃金（労働力の価値）は一般に正常な賃金水準を示すものである。しかし賃金は生活水準以下になりうる。これは賃金が一つの生産から次の生産へ至っての健康や効率を維持するのに不十分であるという意味である。これは組織の全基盤を破壊する恐れがあるので、資本家階級は彼らの自身の過度の貪欲を抑制するために労働立法に従わざるを得なくなった。一方賃金は労働組合活動によって生活水準以上に引き上げられうるし、又生活水準はそれ自身因縁的な要素を含んでいる――それは、一部分それ自身が今迄に規定されている賃金水準によって決

定される。従って生活水準は賃金水準を決定するのではなくて、むしろ時間に限定された底安を雇傭水準に与へるにすぎない。実際の賃金水準は契約上の力によるのである。

さてここで我々は、失業の原因についてのマルクスの最初の説明に進んでもよいであろう。それは資本論の第一巻に見出されるべきである。我々が見て来た通り、雇傭量はいつでもその時ある資本の量及び生産の技術によって決定される。組織が拡大され、技術が進歩し、そして資本が蓄積されて来ると、その結果時が経つにつれて資本の一定量は減少しつつある雇傭量を供給する。しかし他方資本の総額は増加しつつあるのである。一方労働市場は人口の自然増加と土地を取り上げられた百姓や新分野への資本主義の拡張によって独立の生計を奪われた職工産の絶えざる流れによって膨れ上りつつある。従って長期にわたる失業――労働予備軍――が存在することとなる。

時々資本の量が利用しうる労働の量と同等になる場合が起る。その時には失業は一時的に減少する。労働の契約上の地位は強められそして実質賃金は上昇する。これは利潤を減少せしめ、従って利潤からの貯蓄が投資率を支配するが故に蓄積率は速度が鈍くなる。同時に実質賃金率の向上は人口増加に刺戟を与える傾向をもつ。そして更に重要なことは、労働力の不足は技術の発明を刺戟することである。従って資本の一定貯蔵量によって提供されに雇傭の量は著しく減少し、反面雇傭を求める労働力の量は増加を続けることとなる。

失業が再び現れる。一時的な労働者の契約上の優越性は失はれ、実質賃金は下落し、利潤は増加し蓄積の過程は更新される。

マルクスはこの労働予備軍が十年の景気変動をもって週期的に上下するという意見を支持する。しかし私の意見ではそれは完全に異ったものである、景気の主たる特徴は資本蓄積率の速しことである。しかしマルクスの体系では失業は資本蓄積率の増加のために減少するのではなくて資本貯蔵量の増大のために減少するのである。そして賃金が上るときは蓄積率は速度が鈍るけれども状勢には激減の特徴はみられない。貯蓄の減少の結果として資本財の需要が減少する。そして恐らく落後品取引も損害を蒙るであろう。しかし丁度それに相当する賃金財の需要の増加がある。新しい発明がその作用を営み出した時迄は、雇傭の総量が賃金が上つに時に到達した高い水準より低く減少するという理由は何もない。一方高賃金の段階の間は投資が増加したゞけ消費が増加し、活気の衰微を予想せしめるような原因はなにもない。

マルクス自身は上に非常に似た論法を別な問題に関して用いるべ彼は賃金の引上げは流通貨幣の量を増加せしめないであろうと主張している。）

「賃金の増加の結果として、特に労働者の生活必需品に対する需要が高まるであろう。普通にはずっと小さい程度ではあるが奢侈品に対する彼らの需要も増加するであろう。生活必需品に対する急激な需要の増加は疑いなくその価格を瞬間的に騰貴させるであろう。その結果として社会資本のより大きな部分が生活必需品の生産に投資されるであろう、そして奢侈品の生産にはより少い部分が投資されることとなるであろう、というのは余剰価値が減少しその結果、それらの商品に対する資本家の需要が減少するためそれら商品の価格が下落するからである。そして労働者自身が奢侈品を買うところ迄来ると、それ以上の彼らの賃金の騰貴は――この程度で――生活必需品の価格の騰貴を増進させるのではなくて、単に奢侈品購入者の余地を埋めるにすぎない」。

奢侈品に適用するこの理論は資本財にも又適用されなければならない、というのはマルクスの仮説に於ては資本財に対する需要は資本家の貯蓄によって支配されるからである。賃金の騰貴と利潤の減少のために、より少い投資を続けなければならないであろう、しかし資本購入者によって埋められる、そして賃金の騰貴は取引後退の原因ではないのである。

しかし、労働者に於ける変化についてのマルクスの分析は景気変動の問題の分析ではないけれども、それにも拘らずそれは一つの重要な点を明らかにする。というのはそれは次のことを示すからである、即ちもし利子率が硬直しているとへ又はも資本構成が利子率の変化に鈍感であるならば、セイの法則の条件が完全に適応している組織の中に於いてさえ慢性的な技術理論的失業が発生する可能性がある。

オニ巻に於いてマルクスは、資本が再生産され、拡張される機構を分析している。彼はこれをなすに全ての産業を二つのグループに分けることをもってする。即ち資本財を生産するもの（Ⅰ）と、消費財を生産するものへⅡ）である。それで全生産物はⅠ（$C+V_1+S_1$）とⅡ（$C_2+V_2+S_2$）から成る。単純再生産では、純投資が零であるとき $V_1+S_1=C_2$ 即ちⅠの純生産高はⅡの資本の置換高に等しい、そしてSの全部はVと共に消費に捧げられる。拡大再生産（純投資が正）が起るためには、Sの部分は貯蓄され、Ⅰからの購入に向けられなければならない。それで V_1+S_1 は C_2 を超過し、C_2 からそれと等量の投資をすることによって平衡させなければならない。

投資されるべきである貯蓄は最初は保蔵へ財政基金）の形で蓄積されなければならない、しかし全通貨での保蔵高は、金の貯蔵量が増加している場合にのみ存在する。かくて販売なしの購買を表すところの金山の充実の出費は、それ以外の産業による販売と購買との間の遅滞を正確に償う。

カレッキー氏が明らかにした如く、マルクスの方法は有効需要の分析に対する基礎を提供している。そして学術経済学者達はマルクスを無視したため、自らそれを発見するのに非常に多くの時を浪費した。「只一方的な交換だけがなされ、一方では多量の購買のみ、他方では多量の販売……がなされる範囲では、平衡へ二つのグループの産業の間の）は一方的な購買と一方的な販売との価値が同じであるという仮説の上でのみ維持されうる。これらの条件は異常な動きの多くの原因となり、その動きは恐慌の可能性を包含する、というのは均衡は（資本家）生産の不完全な状態のもとでの偶然であるからである。」

オニ巻は又、投資の過程が販売なしの購買を生み、好況の条件をつよく押し進めるような方法について詳細な分析と、その方法によって導き出された循環の長さは設備の平均寿命の長さと関係あるだろうというヒントを含んでいる。全てこはマルクスが有効需要分析の途上にあったことを示唆している、しかしそれをもっと追求する代りに彼はオニ巻に於て新しい手掛り――利潤率低下性の法則――へと方向を転じた。

マルクスは利潤率低下の事実をリカードから受け入れ、しかし彼は、特に土地収穫逓減という語を用いるリカードの説明を受け入れなかった、というのは彼は約組は人間の性質の吝嗇から起るのではなくて資本主義固有の矛盾から生ずると考えたのである。従って彼は彼自身の説明を発見しようとしたのである。利潤率の低下は、金を節約し金貸業者達の危険を減少させる財政技術によって生ずる利子率の長期低下によって惹起されるであろうという現代の見解は、マルクスの観点よりも収穫逓減の法則と同質的である。彼の説明は全く異った方向に沿っている。

資本が蓄積され、技術が進歩するにつれて、「資本の有機的構成（可変資本（賃金手形）に比して不変資本（設備と原材料）が増加することによって高度化される、これはVに対するCの比率に於ける増加によって表わされる。

さてもし搾取率 S/V が一定であると、雇れた人間一人当りの資本が増加するにつれて資本一単位当りの利潤は低下する。S/V が一定で C/V が上昇するとそれに従って $S/(C+V)$ は減少する。

えが利潤低下性の法則である。それはマルクスの云う如く反復法である。

「しかし我々は資本家生産の性質が利潤率に於ける此の低下を惹起することを明らかにしに、何故ならばそれはs/cを増加せしめるからである。

この議論は三つの難点を提示する。マルクスは最初の問題を次のように取り扱っている、「不変資本の価値の増加は、不変資本の原料によって表わされる現実の大量な使用価値の増加を不完全に示すものにすぎない」というのは技術的な進歩は機械を使用する場合と同様に機械を生産することに於いても労働の生産性を高めるからである。かくて物質的な資本（大量の使用価値）が増加するという単なる事実はそこに賃金単位なる言葉によって測られる一人当りの資本の増加があることを必然的に示すものではない。しかしマルクスの見解では、発明は圧倒的に労働節約的（又は私はむしろ資本使用的といいたいのにが）である。その結果生産高一単位当りの資本費用は技術の進歩と共に労働費用より低下し、産業されている一人当りの資本は増加する。しかし彼は、彼が不変資本の相対的な増加は「増加した労働の生産制に対する別の表現にすぎない」というとき、厳密に正確ではない。というのは生産性というものは、資本の有機的構成には何らの変化がなくとも増大しうるものであるからである。

マルクスが見落しにより思われるオニの難点は次の点である。c/vは産業されている人間一人当りの資本と同じことではない、というのはcは不変資本の貯蔵量ではなくてその減価率であるからである。資本財の平均純益獲得率が一定である時にのみc/vは資本の有機的構成と共に変化し、$s/(c+v)$は利潤率と共に変化する。若し恒久性の少い形の資本に投資することによって組織が利潤率低下の反応を示すものならば、マルクスの議論は完璧なものではない。彼にとっては一定期間の純益高は一定であると仮定すること、又はむしろ$s/(c+v)$が低下するとき、利潤率を一定に保つのに充分なだけ速くは純益高は減少しないと仮定することが必要である。

オ三の難点は更にずっと基礎的なものである。全ての議論は一定の搾取率を仮定することに向けられている。しかし「資本家生産方式の特質」は一定の搾取率を維持する傾向をもつということを想定すべきどんな理由があるであろうか。その議論がなす仮定は実質賃金率は生活水準の周辺で一定となる傾向をもつというマルクスの不断の考えに対して大きな軋轢となっている。というのはもし搾取率が一定であるならば労働は純生産高中に一定の相対的分け前をうけとり、そして生産性が増大するにつれて実質賃金率もあがる。

マルクスは例へば一日の労働時間を延長したり、賃金を生活水準以下に低下させたりすることによって搾取率は高められうると提議する。生産性が増加し、賃金財の諸価格が下落するにつれて貨幣賃金は下落しうるという可能性について彼は只一通りの論及をなしているにすぎない。しかし彼が実質賃金は一定であるとするのはもっとも自然な仮定の様に思われるであろう。

そしてもし実質賃金が一定であるならば搾取率は上昇して来る。それでは利潤率低下はどうなるであろうか。それは丁度容易に次のように云うようなものである、即ち利潤率が一定であると仮定すれば、労働の単位当りの資本が増加するにつれて搾取率は増大する。

一つの反復は他のそれと同様である。そしてマルクス自身は此の議論を異った問題にも正確に利用している。彼がいかにして種々の構成の資本によって同じ利潤率を得ることが出来るかを論じている時、彼は異った産業に於ける剰価値率がvに対するcの比率によってどのように変化するかを示している。同じ時に於ける異った諸産業間の情況と異ったときに於ける同種の産業間の情況とが異るべき何らの理由も存在しないように思われる。

マルクスは搾取率には通ることの出来ない高い限界があると信じているように思われる。然しここについての彼らの議論は極度に不明瞭であり、もしそれの意味するところの全部であるとすれば、この議論は誤まっているといわねばならぬことは明らかなように思われる。もし実質賃金が一定であれば（そしてもし有効需要の問題が生じないとするならば）、生産に関しての利潤は生産に従って増加する。もし本当の云い方での賃金が一定で本当の意味における利潤が間断なく上昇しているならばs/vは間断なく上昇している。生産力の増大に限度があるのでなければ搾取率に限度はありえない。そしてもし搾取率が増加しうるならば、利潤率は低下する必要はないわけである。

利潤率低下の法則は、学術経済学から限界生産力逓減の原則を導入することによって危険から救われるであろう。知識の所与の状態では資本が増加するにつれて人間一人当りの資本に比しては少く人間一人当りの生産は上昇する。それは利潤率が低下するということを従えるものではない、というのはもし実質賃金が一定であると生産の全増加量は資本に行くからである。しかし一貫して実質賃金をもってしてさえも、遅かれ早かれ資本が増加するにつれて利潤率が低下する点がやって来るに違いない。けれどもこれはマルクスの議論ではない、というのは彼は決して所与の知識である

非現実主義的な静態の仮定をすることをしないからである。それからマルクスは、多くの学術派経済学者達と同じように、彼の同義反復によってさらわれて来たように思われる。

一定の搾取率の仮定は実質賃金は一定になろうとする傾向をもつとするマルクスの見解とは衝突するけれども、それにも拘らずそれはなすべきもっとも現実主義的な仮定であるとするのは反対されてよいであろう、というのは概して実質賃金は生産力と共に増加しそして産業の生産における労働の相対的分け前は著しく安定しているように思われるからである。しかしもし我々が真実性に訴えようとするならば、資本はいつも効率に用いられているマルクスの仮定は取除れなければならない。若し一定貯蔵量の資本の生産高が、実際にはそうであるが、有効需要の状態に応じて自由に変化するのであれば、C／Kは純粋に技術的な条件によって定まるのではなくて、それは又資本の利用度に従って変化するのである。それで我々は次のように云うことが出来る。即ち一定の搾取率のもとでは利利潤率が上昇している時C／Vは低下し、利潤率が低下している時は上昇する。

同義反復は常にそれ自身を求めることを当てにされることが出来る。利潤上昇の長期ブームの期間中は利潤率を高める同じ理由が、技術の進歩が効率一単位当りの資本を増加させるより速く効率一単位当りの雇庸を増加させる、その結果C／Kは下落する。そして利潤が低下しているときは利潤率を減少させる同じ理由が効率一単位当りの資本が増加するより速くC／Kを高めるのである。同じ様に、一定の短期の情況では、一定貯蔵量の設備のもとでは資本一単位当りの雇庸は増加し、利潤が増加を続けるブームではC／Kは下落し、利潤が減少するときである沈滞期ではそれは増加する。利潤率の実際の動向の分析は有効需要の分析と再入することなしにはそれ以上進歩することは出来ない。

マルクスは利潤率低下説を「資本の絶対過剰生産」の場合を考へることによって説明する。これを私は、「裁きの日の予告」ではなしに、いつも活動中である工程の作用を明確に現わすために単に採用された極端な仮定であると考へる。資本が蓄積するにつれて利潤率が低下するならば利潤の絶額にはある高い限度があらねばならない。二つの点に到達した時に更に投資を続けることを仮定すると、その時はより大になった資本の絶額は以前と同じ額の利潤を受けとることとなる。資本家同志の殺人的な競争が始り、新しい資本は旧い資本と争うこととなる。「資本の一部は完全に又は部

分的に遊休するであろう（何故ならばそれは自己拡張の過程に入ることが出来る前に、活動中の資本のじゃまをせず押し出さなくてはならないからである）。

この情況はカレッキー氏の景気変動の型におけるブームの頂点に於ける情況と類似している。カレッキー氏の考えでは、利潤の絶額は投資率の一件能である。一期から次期へ亙っての投資率が一定である時、利潤の絶額は一定である。しかし一方、資本貯蔵量は増加を続け、そしてその結果利潤は低下する。（マルクスはそれを述べているのにが、「利潤の絶量が同じにとどまっているならば、この絶量は増加した資本絶額を予想するであろう」。資本の一部は遊休しなければならぬというマルクスの説は、商品市場における完全競争の仮定と致する。完全雇庸のもとではいやしくも産れている設備はどれも効率に使用される。カレッキー氏の考え方には不完全競走があり、そして「資本の過剰生産」は効率以下の一般的な作用の形でのそれ自身を示す。（完全競走の仮定が、不完全競走の理論の今日の発展を導いたところの効率以下の作用を除外する事は実状である。）

カレッキー氏の考えとマルクスのそれとの間の相違は利潤絶額の決定にある。そしてマルクスの議論に於いて見逃されている要点は丁度此の点である。

マルクスは更に議論を進めて沈滞の諸条件は賃金の低下を導き、そして之は一時的な救いをもたらすと説く。「この生産の沈滞は後に資本家的限度のうちで生産の拡張を準備して来たように思われる。」ここでケインズ氏の分析はマルクスと鋭く衝突する。マルクスは貨幣賃金の下落は実質賃金を低下せしめるということに同意するが、一方ケインズ氏は（閉鎖の組織では）その主な効果は単に価格を引下げることだけであると考える。これは賃銀の荷を重くし、そして只治す苦の病気を益々重いものにするだけである。しかし実質賃銀に於ける下落は（それは独占の増大、又は賃銀が低下する時も単に価格が膠着していることによって惹起されるであろう）、まだ更に悪いものである。実質賃銀が下落する時、一定の投資率に相応する消費水準は低下せしめられる。失業が増加し、そして生産高は効率よりはるかに下回って下落する。生産高の減少は生産高一単位当りの利潤の増加を相殺する、一方余剰効率の増加額は投資誘因を減退せしめる。かくて、救いをもたらすところが、実質賃銀の下落は不況を深めるものである。

この議論が証明することが必要なもの――投資率は初めに変化しないということ――を仮定しているという事は反対されてよい。そして投資か又は資本家の消

費が直接に増加していると仮定するならば、低賃金という喜ぶべき影響のもとで、利潤も又その時増加するであろう。このような型の議論はトリックに満ちており、そして資本家の心理について便利な仮定をすることによって我々を喜ばせる何かの結果をうることは可能である。けれども、歴史の未熟な試験はマルクスよりもケインズを支持していることには殆んど疑いがない。賃金を切り下げることによる「均衡回復」の政策は一九三〇年代の大不況に於いて大きな試験を与えられた、そしてそれを最初に放棄した諸国が最初に復興を経験したのである。歴史の解釈も又トリックに満ちている、しかし少くとも我々はこの立場を守ることが反対の立場を守ることよりはずっと工夫が要らないと云うことが出来る。

全てこの議論に於いてマルクスは（生産された諸商品の販売によって）余剰価値が得られ、そして利潤率の低下が蓄積を阻止する限りに於て、それは新しい資本が創造されるところの貯蓄基金を制限することによってそのようになると仮定する、しかし別の観点から彼がその問題を処理するのに一つ又は二つの道がある。「余剰価値の有効需要が商品の形に変えられてしまうや否や、余剰価値は生産されてしまったこととなる……今やオニの活動過程が来るのである。余剰価値を表わす部分と共に不変資本や可変資本を生産すべきである部分を含むところの大量の商品、即ち全生産物は売られなければならない……」直接被取の条件と余剰価値実現の条件は同じ性質のものではない。それらは論理的に時や空間によって区別されている。前者は只社会の生産力によって制限され、後者は社会の消費力と色々の種類の生産の比例関係によって制限される。この社会の消費力は絶対生産力や絶対消費力によって決定されるのではなくて、大集団の人口の消費を更少欲い範囲内で変え得る最少に引き下げるところの分配の排反条件に基いた消費力によって決定される。更に消費力は資本拡張への貪欲である蓄積性向によって制限される。……此の内的の矛盾は、生産の外の分野の拡張によってそれ自身を均衡させることを求める。しかし生産力が発展する範囲は、消費の条件が依存する狭い範囲と矛盾してこの内的矛盾は見出される。」更に、「全ての本当の危機の決定的な原因は、全社会の絶対消費力のみが彼らの限界となるというようなやり方で生産勢力を発展させようとする資本家の生産性向に比較して、大衆の貧乏と制限された消費が常に残存することである。ここで、上昇する実質賃金を伴うところの利潤率の低下は画面から姿を消し、そして色々の種類の生産の比例関係についての論及びオニ者における拡

（八十四頁、続く）

ヒックスの厚生経済学

篠崎　晟

この文章で主に書こうとしているのは、私自身の理解した程度に於てのヒックスの厚生経済学についてであるが、そのすべてに渉ってではない。(一)に於てはピグウの経済的厚生の増大に関する命題及びその批判について、(二)に於てはカルドアの所論について、(三)(四)(五)に於てはヒックスの理論について、である。ヒックスの論文の不完全発達下の厚生条件については、私の理解の程度を越すのでとりあげなかった。従って甚だ不充分なものではあるが、あえて書くのも私自身厚生経済学に、その実践性の故興味を持っている故である。参照論文は左の通りである。

J.R. Hicks; The Foundations of Wellfare Economics. Economic Journal Dec. 1939

Niclas Kaldor; Wellfare Proposition of Economics and Interpersonal comparison of Utility. Economic Journal Sep. 1939

一

ピグウによって一応の体系が形成された厚生経済学は、その後数の樹立した命題時に次の命題を批判する事から出発して所謂新厚生経済学として発展した。ピグウの第三命題とは「国民分配中、貧者へ帰属する割合が、大となればなるほど、経済的厚生は増大する。」というのであって、資本家に言えば、購買力が富者から貧者へ移転する事によって、或は貧者の需要の対象となる財の生産方法が技術的に改善され同時に富者の需要の対象となる財の生産方法が悪化する事によって、或は貧者の必需品に対する富者の需要を他に転換させてその財の価格を低下せしめる事によって、経済的厚生は増大するという事である。この命題の根據はピグウによれば限界効用逓減の法則であって、富者の所得の限界効用は貧者の所得のそれよりも少であるから富者から貧者への所得移転はより小なる欲望満足を犠牲にして、より大なる欲望満足を可能ならしめ社会全体の満足は増加するという事に、その基礎を置いたのである。この命題に対する批判は、ハロッド、ロビンソン等に依って経済学の方法論に迄及ぶ程なされたが、簡単に言えば第二命題は生産例を切離し効用逓減法則に立脚して初めて成立するものであり、しかもその際各人は相似た素質を有する事及び富者と貧者との

間の効用比較の可能性が前提とされている。従って若し各人の慾望状態が異っているならば、かゝる命題は成立し得ないし、又個人間の効用比較が不可能な場合にも成立し得ない。しかるに個人間の効用比較は不可能であるから、この命題は絶対に正しいとは言えないというのがその批判の要点である。

二

新厚生経済学はこの批判を受け入れ個人間の効用測定という問題を回避する事によって出発するのであるが、こゝで注目すべきはニコラス・カルダーの論文であって、それは厚生経済学に場を与えたという意味であるので、彼の論旨について述べてみよう。

彼は穀物法撤廃（註）を例にあげてその効果を次の如く要約する。(一)穀物価格の下落をもたらしその結果以前と同じ貨幣所得でも今では以前よりも高い実質所得となるのであろう。(二)（穀物法撤廃は）所得分配に一つの方策を導く。即ち地主階級の所得を以前より低下させ他の人々に所得の増加をもたらす。しかしてこの場合、以前と同じ所得分配を保つ事が政府に依って常に可能である。それは所得の減少した地主に対して補償をする事であり、その補償の財源は所得が増加した人々から税金として徴収する事である。そうすれば全体が所得者としては以前と同じ状態にあるが、穀物の価格が下落したのであるから消費者としては以前より良い状態になる。

従って右の例の如く、生産力を増加せしめたり実質所得総額を増加せしめたりする様な政策がとられた場合には、個人間の効用比較という問題にわずらわせられないでこを考える事ができる。何故ならその様な場合には、誰かを以前より貧乏にすることなくして、他の誰かを以前より裕福にすることは可能だからである。個人が彼の満足を増大しようという時には二つの場合が考えられる。一つは他人を犠牲にする事なく自己の地位を上げる場合と、第二は他人を犠牲にして自己の地位を上げる場合とである。ピグウの第二命題は後者の部類に入るであろうが、その場合は満足を評価する物差がない限り（それは無いものと言って差支えない）社会全体の満足を増大せしめたとは言えない。然るに第一の場合に於ては明らかに社会の経済的厚生を増大せしめると言い得るのである。以上がカルダアの論旨であるが、こゝは効用の比較を考えてくても社会の経済的厚生の増大が可能な場合のある事を示している。こゝに新厚生経済学の進むべき道が与えられたのである。

（註）当時イギリス議会の主权を握っていた地主階級

は輸入穀物に重税を課して穀物価格を上げを行い、もって利益を上げるべくこの穀物法を一八一五年成立させた。このため労働者階級は深刻な生活難におそわれたが、遂に一八四六年議会の債務も変って此の法律は撤廃せられた。なお穀物法撤廃は一八四九年の航海条令撤廃と共に、英の自由貿易体制の成立に大なる意味を有する。

三

ヒックスの論文「厚生経済学の基礎」の内容に入っていこう。彼はパレートによって始められた選択理論を厚生経済学に導入する。選択理論によればある規模の選好を持ちその選好を満足させるための最善の方法をもってその活動を規制する個人（自由経済単位）を考え、経済学の問題は先ず各個人の「好み」とそれの達成を妨害する「障害」との対立に存するとする。その研究の結果は具体的には生産・交換される財の量や価格の理論となるのであるが、それだけではいけない。更に進んで之等各人の活動は、その意図する目的即ち選好を満足させるのにどの程度に効果的であるか、つまりある特色のある特定の経済組織の効率を目的と成の手段としてイクザミン出来ねばならない。かくして与えられた経済機構の効率をイクザミンする研究は経済学の主要部分となるのであるが、その前に解決せねばならぬ一つの困難に直面する。それは各個人の比較という事である。経済組織というものは目的達成の為のメカニズムと考えられるが、その目的は一つの組織だったものではなくて、社会に雑々の個人の存在する限り妥協的且つ独立性を持ったものとなるからである。これを解決するためには、三つの方法が考えられる。その一つは各個人をその研究者の主観に於て妥当と考えられる個人に代表させて了う。つまり各個人の選好の規模を一つの基準に準じさせてしまう方法がある。しかしこれは研究者の主観による為、恣意的なものが多々あるので妥当とみなすことはできない。第二はマーシャル、エッジウォース、ピグウなどによって伝統的にとられて来た方法で、各個人の選好規模の総計を何等かの方法で見出そうとするのである。しかしこれは各構成分子にウェートを加えなければその総額は信頼できない。例えばマーシャル、ピグウでは貨幣の限界効用は貧者も富者も同じとしているが如き点である。そこで第三の方法であるがそれは先述のカドウァの方法である。これは各個人間の比較が不可能な為、経済組織の総効率がはかられないという一般的な規則の例外の場合を考えるのである。

かくして、厚生経済学は、誰をも犠牲にすることな

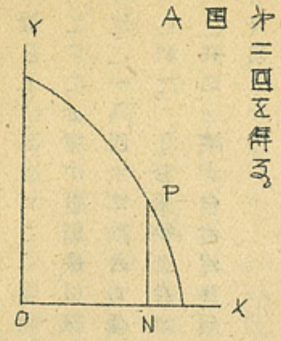
くして社会の効率――経済的厚生を増大せしめるにはどうすれば良いのかという事の研究であるということになる。

四

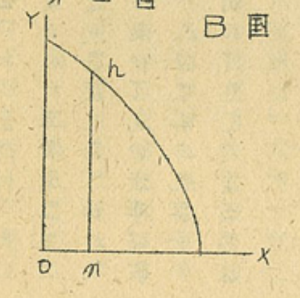
経済組織の最適構成を、再構成が何人をも以前より貧乏にしないという条件のもとに、各個人を出来るだけ裕福にするような構成と定義する。但しこの最適構成はたった一つではない。それは所得の分配方法によって種々あるのであるが、こゝではそこ迄考えない。

この定義の意味は口頭経済理論における比較生産費の原理によってよく説明出来る。今AB両国でXY二財を生産する場合を考えよう。二国の代用曲線の代用曲線――一定量の生産資源より獲得せられる二財の各々相互に両立する極大量の組合せを表す曲線――は、収益逓減法則の作用する場合は原点に対し凹であり第一図、第二図を得る。

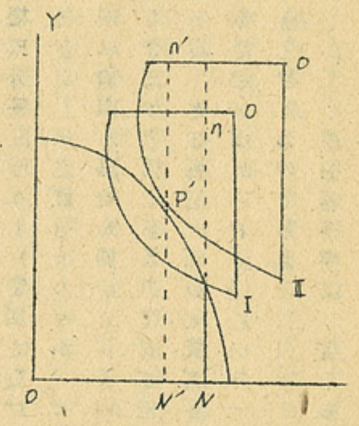
第一図



第二図



第三図



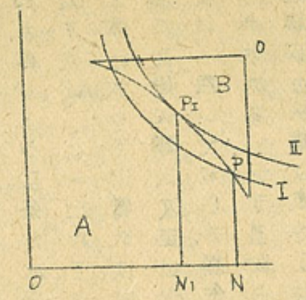
さて比較生産費の原理に依れば二国の二商品の限界生産費の比率が同一の点にて生産を行い、貿易を行うのが両国にとって最も有利とされている。即ちBの代用曲線を百八十度回転させP及びnを一致させれば第三図のIを得、再構成が行われゝば、つまり両曲線が一点にて接する状態になれば第三図のIIを得る。図より明らかな如く、同一量の生産資源より共に以前よりは多い量を生産し、総量に於ても勿論多くなっている。即ち効率は一層大となっているのである。二曲線が一点にて接するという意味は勾配が等しくなる事である。代用曲線の勾配は二商品間の限界生産費比率を表すから、最適構成の機構は二国に於て、二商品の限界生産費が同一の比率であれば良いという事になって、比較生産費の原理に帰する。

二個人間の交換の場合も之も全く似た様な操作が出

P及びnにて生産が行われているとせば、Xの生産量はAではON、Bではon、YのそれはAではNP、BではnPである。

来る。この時の代用曲線は所謂無差別曲線――或る特定の個人に同量の満足を与える二商品の諸々の組合せ量を示す曲線――であって、限界効用逓減法則が作用する正常型は原点に対して凸である。前と同じ操作によって第四図を得たとする。

第四図



曲線Iの如く二点にて切したとすると最適とは言えない。最適状態は曲線IIの如く二人の無差別曲線が接する時になって始めて得られる。何故なら個人Bの満足量には変化が無いが、個人Aはその無差別曲線がIよりIIに移動する事に依って以前よりも大なる満足の量を得るからである。無差別曲線の勾配は二商品間の限界効用の比率を表す故、二商品間の限界効用比率が二個人にて同じであるならば最適構成と言い得るであろう。

後述の如くピックスの意味では経済組織が最適構成であるためには、凡そ代用可能性の存する所、従って経済的選択の余地の存する所では、あらゆる一対の生産物乃至生産要素間の代用率と生産者は又は消費者の時係を考えることが必要である。

五

次にこの最適條件達成のための諸条件を考えよう。

(一)限界効用

えはピックスに依るとその社会に於て二商品間の限界代用率（Marginal rate of substitution）は、之等を消費する各個人及び生産単位に於て等しくなければならないという条件であるが、えは二商品間の限界効用の比率が各個人間及び各生活単位間で等しくなり、且つ共に同じであるという事である。かくの如く関係は生産物間のみでなく生産物と生産要素、生産要素間にも成立せねばならない。従って例えばある生産に於ける労働の限界生産力と限界不効用とは等しくならねばならねばない等々という事になるのである。ここで注意すべきはこの条件は必要ではあるが充分ではないということである。何故なら二曲線の接点は、（先述の第三図の場合を例にあげれば）Y財の数量をそのまゝにしてX財を極大ならしめる点（P_1）及びX財の数量をそのまゝにしてY財を極大ならしめる点（P_2）との間に存在するのであって、唯一つではないからである。

(二)安定条件

えは確立された地位が極大の満足を与える点であって、極小のそれではないための条件であり、代用曲線

の要曲性という言葉で定義される。具体的に言えば、消費者の無差別曲線は原点に対して凸、つまり限界効用逓減の法則が成立せねばならぬ。次に生産の代替曲線は原点に対して凹、即ち収益逓減の法則が成立しなければならない。又生産要素についても限界効用逓減の法則が成立せねばないということになる。

(三)総体条件

之は、一生産単位又は一消費単位に於て若しくは一般にある商品の生産又は消費を完全に止めても改善がもたらされることはないし、又新商品が紹介されても同じでなければならないという条件であつて、善生産要素にも同じような条件が満たされねばならない。之を説明すれば、こゝに於ては考慮される財が共にその経済主体に依つて消費又は生産される事が前提であつて、新たな財の導入又至は今迄あつた財の破棄は考えられない。若しそれらの操作に依つて一層の改善がなされる余地がありとするならば、今迄述べてきたような最適構成の枠構は未だなお、最適構成の経済枠構とは言えないからである。

六

今迄に述べた三つの条件は、あらゆるタイプの経済社会にとつてその最適構成のためには妥当なものであるが、しかし一番興味のある応用は個人企業によつて生産のなされる社会の効率を批評したり吟味したりする手段として使用することである。個人企業のもとにあつては、ある変動は価格システムの変動として捉えられるが、それは市場に於てある者には有利に働き他の者にとつて不利に働く。しかし我々は損害を受けた人々に対する補償を考えることによつて、全体としてみて以前よりも福祉となる様な再編成を可能と考えた。個人企業の経済社会を考える時、先ず完全な自由放任政策の状態を取上げるのが自然的である。之は全企業が完全競争下にあり従つて各生産者及び消費者が、売買するものの価格をすべて妥当なものとみなし、その数量を与えられた価格のもとで調整する様な場合である。この完全な競争下にあつて消費市場では、各消費者は二商品間の限界代用率をその市場価格の比率に一致させ、生産者市場では各生産者は彼の売る商品の限界費用をその市場価格に一致させる。かくして最適構成のための限界条件は満たされる。又かゝる完全競争は収益逓減法則下に於てのみ万能であるから安定条件は総体条件も満たされる。従つて完全競争下では最適構成は当然達成されねばならない。しかるに現実は完全競争に殆んど近い状態に於てすら最適構成は達成出来ない。何故ならオ一に、かゝる状態下に於てすら人間

が他人の繁栄に影響を与えるのは価格システムの人力ニズムを通してのみではない。又商品の限界生産費と等しい価格を支払うとしている限り、その個人は当該商品を獲得出来ねばならないということは社会一般の利益にとつて本質的なものでもない。もつともこの場合は当該商品の生産費を分担しているので、他人を負担にしてそれを獲得したとは言えないが、他人を負担又は補償にして商品を獲得するという場合もあるのである。

オ二は予想に関するものである。最適条件は「前に」えが満たされねばならないという性質のものであるが、それが満たされたか否かは、「後に」ならなければわからない。完全競争下に於てすら予想価格に等しかるべきものは予想限界生産費である。若しこの予想が間違っていたら、編成されたものは、その計画にかかわらず最適とは言えないであろう。これればかりではない。更に「危険」に対する予想がある。企業者は「危険」に依つて影響を受け、通常その提供価格に危険に対するプレミアムを附するため正当な限界生産費よりも高くなる。非常に多くの危険の予見出来る企業に対する投資は結局無駄となる確率が大きいから大した問題ではないとも言えるが、実際はそうではない。何故ならその時投資が危険の多い企業から少い企業へと流れていけば良いが、そうはうまくいかないからである。所謂流動性選好 ― えは富を貨幣の形に於て保有しようという欲求であるから、危険予防の一形態と言えよう ― が大なる時、えに該当する。かく流動性選好が大で大量の「非自発的失業」を見る時に、利子率を下げたり公共投資を行つたりしようとするケインズ理論の政策は、我々が定義した最適構成への動きを増進させる諸方策と言えよう。

ヒックスは更に進んで不完全競争下にて厚生条件はどうなるかについて、論を進めているがそれは私の理解範囲を越えるので、勝手ではあるが止めようと思う。

ケインズの社会主義観

中川 宏

現在我々の生きている世界は大きく二つに分けられている。即ち西欧とソ連とにである。そして現代経済学の潮流も大体二つになるように考えられる。マルクス主義経済学とケインズ派経済学とである。前者はソ連及びその他の社会主義圏に於て、その経済組織の根本理念となっているし、後者はアメリカを中心とする西欧諸国に於て同様の役割を果している。之等二つの経済学がその純粋な形で夫々西欧、ソ連をその安住の地としているということは、云い過ぎであるとしても、現在、両陣営で行われている経済理論の主流は、その端を之等二つの経済学に発しているということは可能のように思われる。[1]

之等二つの経済学は夫々資本主義についての考え方を、その時代の社会情勢を背景として[2]、各々独自なものを形成したのである。即ち、マルクス主義経済学は資本主義の透徹した批判であり、ケインズ経済学は、古典派経済学に対する反逆であるとされているのであるが、両者の決定的な相違点は、マルクスが、資本主義は歴史の流れのうちの一時期を担うものに過ぎなくその内部の矛盾がだん〳〵大きくなることによって必ず崩壊し、他の主義（社会主義更には共産主義）がこれにとって変るであろうというのに対し、ケインズは、資本主義は数々の欠点のあることは認めるが、それを適当に統制することによって立派な成果を得られるとしている点である。前者は、全く資本主義の崩壊を信ずるのであるが、後者は適当の修正をなすことによって資本主義は存続し得るとしているのである。とにかく、現在この二つの経済学の流れが他の諸々の経済理論をおさえて主導的地位を占めていることには疑いはないと思うのであるが、この各々の経済学の創始者が相手をいかに考えていたか、マルクスはケインズ経済学をいかに考え、ケインズはマルクス経済学をどのように見ていたか、ということは興味あることだと思う。ケインズ経済学が成立した時には、マルクスは既に亡くなっていたので、彼によるケインズ観は永久に聞けないのであるが、ケインズによるマルクス及び社会主義観は、彼が時々この点に触れているので知ることが出来るのである。

以下、彼の著書その他[3]に従って、彼のマルクス観等を一瞥してみよう。

(1) 例えばソ連ではマルクス主義に端を発するレーニン、更にスターリンに至る流れ、又、アメリ

カにおけるアメリカン・ケイジアンによる経済理論等についてみるとこのことははっきりする。

(2) マルクス経済学は自由放任主義をその最高の原理とする市民社会が一八三〇年頃より、階級社会の諸矛盾を表面に露呈しはじめた際に形成されたのであり、ケインズのそれは、一九三〇年前後の世界大不況をその背景として持っているのである。

(3) J.M.Keynes ; The End of Laissez-Faire, 3rd impression, 1927
J.M.Keynes ; The General Theory of Employment, Interest and Money, 1951
D. Dillard ; The Economics of J.M.Keynes, 1948
岡本好弘訳
「J.M.ケインズの経済学」

二

ケインズの「自由放任主義の終焉」（The End of Laissez-Faire, 1926）は標題の示す如く、古典派経済学の重要な原理である「自由放任主義」について、それがいかなる起原を持ち、どのような思想の流れによって形成され、唱えられ、且つ批判されて来たかを述べ、最後に彼の意見として「自由放任主義」は国民経済を維持するのには適当でない、としている。五十頁ばかりの小冊子である。[1] 従って、その中にマルクス主義に関する一章を設けているわけではないし、マルクス批判にわざ〳〵頁を割いているわけでもない。

この小冊子の中に次のような一節がある。即ち、「しかしながら、自由放任主義は経済学の教科書のほかにその他数々の味方を有して来た。さて、次の事柄は認められるべきだと思うのであるが、それは、自由放任主義は、一方には保護関税主義、他方にはマルクス派社会主義というそれに反対する提案の内容の貧困さによって（by the poor quality of the opponent proposal）健全な思索家と理性を有する一般人の心にますゝ固く認められて来たということである。しかし之等の学説は両方共、主として自由放任主義に賛意を表する諸推定の侵害によってのみでなく、単なる論理的錯誤によっても特徴づけられるのである。それらは両方共、思索の貧困さの例であり、過程を分析し、それを結論にもって行く能力の無いことの例である。それを結論にもって行く能力の無いことの例である。それらに反対する議論は、自由放任主義の原理によって強力にはなったが厳密にそれを要しない。それらのうちで、保護関税主義は少く共一応はもっともらしいし、又その評判というものを促進しようとする力の

も何等驚くにあたらない。しかしマルクス派社会主義は、常に思想史家にとっては驚異的なものとして存在するに違いない、――どうしてあれほど非論理的で思慮なる学説があんなに強力で永続きのする影響を人々の心に与え、又それらを通じて歴史の事件に影響を与えることが出来たか。とにかく、之等二つの学派の明白な科学的欠陥は、十九世紀自由放任主義に信望と威力を与えることに大きな貢献をなしたのである。」[2]

経済学が社会科学である以上、自分の経済学が科学的に欠陥を有していると云われる位、経済学者にとっての侮辱はないように思われるのであるが、ケインズは、こゝばかりでなく、常にマルクスの著作を軽蔑していたらしいのである。[3]

(1) この小冊の最後の方に、後年の「一般理論」に見られる思想をうかゞうことが出来る。

(2) ケインズ「自由放任主義の終焉」三十四頁（三十五頁

(3) 例えば「T・M・ケインズの経済学」（邦訳）の三五五頁には「マルクスが有効需要に関し、若干のべていることを単に認めるだけで、常にケインズは、マルクスの著作を軽蔑していた」とある。

三

ケインズは、ソビエット・ロシアの経済体制即ち社会主義体制をどのように考えているか。勿論、それに対して賛同らしいものは、全然与えていない。むしろ反感を抱いているようにさえ見える。彼の主著である「雇傭利子及び貨幣の一般理論」（The General Theory of Employment, Interest and Money, 1936）についてみると、先づ「生産手段の所有は国家のなすべき重要なことではない」[1]とし、別の個所では、政府の機能による大きな統制を国民経済に加えることが完全雇傭を表現するために必要であると云い乍ら個人的発意と責任の働く範囲はまだ残っていると云い、この範囲内では、個人主義の伝統的な利益というものは、まだ妥当するのである」[2]と云い、又個人主義についてそれはその欠点と濫用を除く限り、他の制度を比べて、個人的選好の分野を広くするという意味で個人的自由の擁護者であると云った後で「個人主義は又、生活の要求件の最もよき擁護者である。之は、明らかにこの個人的選択の拡大された分野から生じたものであって、之を失うことは、画一的又全体主義的国家のすべての損失のうちで最も大きなものである」[3]と述べている。「今日の官僚主義的国家組織の能率と自由を――にして矢張の問題を解決しているように思

われる」[4]

之等はすべて、彼が政府の干渉の必要性を大きく打出していながら、その経済、社会哲学の中では、個人主義を固守しているということを示している。

(1) 「一般理論」 三七八頁

(2) 〃 〃 三八〇頁

(3) 〃 〃 三八一頁

四

ケインズのマルクスについての考え方は、以上の軽蔑はないだろうと思われるような悪口をもって連なっていると云った感じがするのであるが、ソビエット・ロシアの経済制度に対する彼の懐疑心と嫌悪も又、並々でなかったのを思うと、彼はそれらのものに対して、一種の本能的偏見を有していたのではないかとさえ感ずるのである。

彼の育てられた、彼の住んでいた英国の個人主義思想に対する執着とでも云ったものが、知らず〳〵表面に出て、あれほど迄の軽蔑を与えたのではないだろうか。シュムペーターは、ケインズを評して「私は、マルクス学者ではない。だが私は、マルクスの偉大さは充分認めている。だから、マルクスをシルヴィオ、ゲゼルやスクラス少佐と同一視する立場には慣れない」[1]といっているが、実際マルクスの著書を読んでもいないし、その実あまり感心はしていないのであるが、それにもかゝわらず多少の共感を呼ぶことさえあるのは、ケインズが上流社会の出身であるのに対して、ボルが少く共上流などという社会の出身ではないということから来ているのかも知れない。

(1) Journal of American Statistical Association, Dec, 1936
但し「T・M・ケインズの経済学」（邦訳）
三五六頁、註五八よりの引用

中国文化の指向するもの

吉岡卓治

いつか中国の記録映画を見に行ったことがある。それは新中国の建国記念祭の模様を写したものであった。出て来るシーンはいずれも独特の物さびしい旋律にあわせて踊る民族舞踊や記念の会合、各民族代表の北京到着等で、終り迄見ているのは相当にくたびれたものである。随所にさし入れられた相手の連続は全くがっかりのならぬものであった。

観覧者はほとんど記録映画である点を商して見ても中国映画は未だ幼稚であるとの感を持ち、あるいは、彼の国の芸術そのものに大きな疑問をもたれただろうと思う。

そう言った観点から、私はこゝに社会主義体制下における中国の芸術のあり方について少しく考えて見たいのである。

この映画製作について見ると、政府の重要な文化政策の概要となっており、又その方針書とも言うべき〝文芸路線〟には、人民を基盤としに、封建文化を打倒し、革命意欲をもりたてるものである事は絶対の要請であるとされている。したがって、現代中国のいろいろな文化作品が、新中国を讃美し、封建制や、帝国主義を憎悪するものが多いのは自然の事であると言わなければならない。

四察の蕃兒を始め、これを批判する方が皆、文芸の形式化を指摘し、プロパガンダは文芸作品の堕落であると断じられるのもきわめて当然である。

だが私はこの問題は少くとも、我々のおかれている芸術的感覚の世界で判断すべきではないと考える。

仮に今行われている批判をすべて肯定するとしようがそれは同時に、それがいかなる芸術思想の地盤にたって見ているかの問題を含んでいる。所謂文雄は〝文学とは、人間がいかに、わけがわからないものであるかを浮きぼりにして見せ、かつ読者がそれを考えることであること〟と言って説明をしているが、このような無目的な、人間存在自体の意味を考えようとする態度からは、当然、現実の人間関係の中心は要然において拒絶され、要然が中心テーマとなるわけである。（小説作法）

一方、これに反して国民文学と言う観点もある。これを唱導する人々は人間関係の根本を社会的関連性において捉え、これを改善する意欲をもりたて、志気を

鼓舞するものこそ文学のあるべき姿であり、任務に他ならないと説明している。

いづれの見解にしろ、こゝで深く正否を論ずる余裕はないが、とにかく、その別れ目は人間存在をどのように把握するかにかゝっているわけである。

この二者の選択は誰がなしているかは別にのべる事として、中国の場合は、社会関係が基礎となって、中国文化は、その文化の母体である中国人の大変敬をしめる別個階級がリードすると言う論理によっているわけである。

従って中国の新文化の方向を、一概に論ずるのは、文芸思想の二大対立を、こゝまで延長するそしりを免ぬかれない。我々の時代は対立以後の段階にあるのであって、こゝでは、存在するもの、存在するものとして、これをいかに認証するかに問題が移っている。

文化そのものゝ特質として、一口における文化の生態が、より強大伝承力をもっている文化の担手にリードされるのは当然であるし、その当事者たちの圧倒的な嗜好の傾向によって、変転して来たわけである。

文化遺産がある時代では迫害され、侵略の対象となったにもかゝわらず、強き者の勝利の連続であり、常に実践を離れては存し得なかったのは極めて興味のわく事実であるが、それと共にこの事実は、何者も文化を規制し得ない事を厳然と物語っているのである。

こう言った文化文芸変動の本質は、中国においては、まさに独特の発展をとげつゝあるのである。例えば、その作品発展の動機は、ことごとく〝人民の現実生活を反映し、人民の要望主義、革命事業にたいする献身と英雄主義を表現している。それは広大な人民を教育し、偉大な人民を教育し、偉大な平和建設―国家の工業化と社会主義的改造の事業に人民をふるいたっせるう之に大きな役割をはたす事にあるわけである〟（人民中国オ八号）

このような目的は上からの、言わばあっかましい文化の引きづりや強制であると言った見解が行われるもとになっているが、我々はこれらの方針のすべてが労働者階級や人民のために奉仕すると言う根本命題にたっている事を少くとも理解しておかねばならない。

誠のためであるかと言う前提は、最大多数の人々に於て集約されている限り、そしてこの前提を承認する限り民主々義の原則に従っていることも御承知戴けるであろう。

中国の現実は大半の人口がまだ国民の食糧生産に止まる零細な農業に従事し、生活水準もその厳しい発展ぶりを話題とせられるにせよ、絶対的には依然として極度にまずしい状態にあり、しかも建国以来数年を

しかも経ていないような口家において、文化施設がたぐく取りあげられ、善美な歩みを見せている事は注目に値すると共に、これが本当にゆたかな生活をめざしている証左であると言えるのではあるまいか。

映画活動の一つの中心である〝移動映画班〟について見ると、一九三四年（労農赤軍時代）頃から驃馬の背にフィルムをのせ、人里離れた村や町、辺境にちかい山岳地帯、砂地にちかい島々など、いたるところに足をのばし、いま迄一度も映画と言うものを観に事のない農民や少数民族がいつでも映画を見られるようになったのであるが、これが映画の普及、情操の発育につくしている功績は非常に大きいと言わねばならぬ。

現在六億一千万人口を擁している中口人は、非常に高い調子で、その共和国政府を支持しており、その中口革命の成果にたいする感激は並々ならぬものがあるようである。

その証拠に、近頃あらわれている文芸作品はほんと解放事業の成功による生活の向上をよろこび、新時代を謳歌するものである。しかもそれが自由選択で人々の鑑賞にまかされているにもかゝわらず、驚嘆的な盛行を続けるのは、大多数の読書の熱心な支持なくしては考えられない事である。だから、支持あるところ、文芸作家の意欲はそゝられるのである。従って中口の現代作品はすべて、中口人民の当面の問題意識に適合するもののみがふるいわけられ、彼に支持されているのである。いわば、こゝにおける共通の広場が、革命の興奮を、新中口の建設に集約されており、これはかつての半外口植民地国家の時代と現代の生活の安定と言う事から生れて来ていることである。この感激が続いている限り、〝夏理はいくらくり返してもくり返し過ぎる事はない〟との格言のもとに、口家の建設から間もない春の解として、口家の創造を喜び、くり返し味わう度ごとに新たなる感激を味わっているのが現状ではなかろうか。

我々がこれに接する場合に、我々自身が受けて来たしてその中にひたり切って、我々にしみついてしまった相対主義的な感覚によっては、理解をさまたげられるのは無理もない事なのである。言葉をかえて言えば、それは、我々が貴族趣味にかかってしまって、いたげられた人々を理解する能力を失ってしまったと言う結論を導くことになるのではないだろうか。その実で、現代の意味をおき忘れ、目をつぶっていると言った反時代的考察のみをこと〻する危険が、現に我々にも存していると考えられる。我々は社会の合理的運営をめざし、人間行動の幸福を求めて経済学を学んでおりながら！我々自由のうちにある二律排反によって目的性を失った生活をしていると警告したいのである。

以上、ほんの思いつきにすぎない推論ではあったけれども、私は現代中口のまじめな建設事業への意欲が、極めて実際的に、文学へと発展しているのを見るとき、我々の方の建設は、我々の手のうちにある事と考えあわせて、ます〳〵我々の意欲を高めあり、具象化せしめる事が必要であると思うのである。

人間精神の追求や、生きる事の意味を考える以前に我々は存在している。これは我々の存在の否定出来ない真実性であって、この存在の価値を高め、幸福な生活をたしかめて行くために、我々はもっと目を開くべきであると、私は結論する。この目的のために、我々は積極的にチャンスを作らねばならぬとされるであろうが、このためには、我が四囲は絶好の土台を与えている。我々の議論も、見事な下地となるであろうし、又我々はぜひ、そうするべきであると考える。諸兄の御賛同を、心から希望し、共に眼を東西に古今にくばって行きたいと思う次第である。

一九五三年七月十七日

小樽読んだまゝ

―小樽港音話―

加藤寛

小樽に来てから早々二年になる。受験の折に当時紅顔可憐な小生（勿論現在でもその面影はたぶん存在しているが）が駅頭に降り立った時の第一印象は只一言、〝汚ネー町だ〟に尽きる。道路上では、上はツルハシ、下はトンカチに至るまで全ゆるズッカキ器具を総動員しての雪割りと言うどう見ても雪国情緒とは申されない風景であった。〝これでも住めば都さ〟との半ば諦めに様子の先輩に慰められて少くとも四年はこの地に過す事になった次第である。

小樽は全市これ山と坂から成立しているかの感があるが裏の天狗山が海抜五三三米、毛無山が五四八米であるから町全体が大分の高所まで拡がっているわけである。従って眺めは大分よろしく、小樽港に実在する大小の船舶が手にとる如く俯瞰できる。

所でこれから述べる事はこの小樽港の北海道開拓時代に於ける発展過程である。左様な事は失礼御承知の諸兄が多いと推察するが、更に何かれたら読んでいた

だきたい。

往時は日本海に面した一小漁村に過ぎなかつた小樽港が現在の大を見るに至つたのには一つには天然の利にもよるが、一つには北海道開拓使の厳重な保護の影響が大であつた事にもよる。

夫れ前者の一として地形的には小樽港は鉄道至出により札幌に三三・八粁、室蘭に二一四・六粁、函館に二五二・五粁、釧路に四二八・五粁となり他の三港のいずれよりも札幌に近いが日本海に面しているため、戦前行われていた対露太、ソ連、満州方面との貿易交渉が現在絶滅に近い状態にあるので、太平洋方面の港湾に比べて対外貿易の面では地理上不利な面が予想される。現在の状況では、函館港は辛うじて青函鉄道連絡船と北洋漁業基地で命脈を保つているが然であり、それも前者は、若し青函海底トンネルが成就した暁には如何なる事態に至るかも知れず、後者とし肝心の機荷は北洋から大部分函館を素通りする有様であり、あまつさえ、新興釧路港が集荷港としてその地位を奪わんとするに致つては、今夏行われた北洋漁業会は、old-days の良き頃を偲み、又それを幾分なりとも再現せんとする悲願の結果これたものと見るべきであろう。釧路港の発展は戦後目覚ましく将来への期待は大なるものがある。室蘭港は小樽港その他に比べてその港湾設備は群を抜いている。小樽港の地主は、その厂史から言っても、港湾設備は余りにもお粗末ではあるまい。

一寸脱線にそれたが、次に小樽港の地形について簡単に記そう。北部は石狩湾に面し、西部、南部は山地に囲まれ僅かに東部の一面のみが石狩川の沖積平野に漸移している。この地方一帯は新第三紀に海底火山が生じ、斜長石英粗面岩を噴きだし、その後方英粗岩の熔岩が広く流出したもので、山地の多くは更にこれより後期の噴出による輝石安山岩がこれらの上を被つたものであると言われる。前の北に東西に亙つて走る山地の赤岩地区があり、海岸側は侵蝕されて断崖絶壁を形成し、良き rock climbing の練習場となつて居り、又これが西北風の突越する小樽市に於て防風地となり港湾形成に重要な素因となつている。

以上で自然的条件は止め、次に開拓使の保護政策について述べてみたい。この問題が前者よりも一層興味をそそるのである。

北海道庁の前身たる開拓使の主眼目は石狩原野の開発であり、それは間接的に小樽港の発達を誘引したのである。即ち記録によれば小樽港の場所に位置していた漁場には、夏季及び春秋季にのみ水産物運搬の舟が入るのみで、冬期は入港舟なく、相舟の数が五倒的で

荒船は極く少なかつた。

明治十二年

和舟　二三三〇　洋船八七

これより後、開拓使の東久世長官及び黒田次官の中央政府に対する上申書中に、「北海道中地界天険四方へ号令を達すべき枢要の地は札幌に若くはなし、因つて札幌を以て根據となし、使庁を立て、生産の業を盛すを要す……」とあり、これにより札幌の発達は石狩原野の発達を促し、石狩原野の発達は小樽港を発達せしめた間接の援助をなした状態は、丁度横浜と東京の関係に似るものがあり、小樽港発達の素因は確かに札幌の外港としての地位の確保にあつたと言つてよい。但しそれが自然的要因よりも人為的要因に重きを置いている事は注目すべきであろう。

更に開拓使は小樽の商業、漁業、運輸故に、衛生、移民に渡つて各々保護を加えた。即ち明治三年十二月薪炭、米塩の輸出を禁じ、同五年より三ケ年間、外口貿易を除き輸出の租税を免除し海運業輸出を奨励した。又人口においても移民を前記の如く保護したので、明治十二年末までに原住の三倍余りの七七〇六となり、大正九年までは札幌の人口数を上廻つていた。当時の輸出入物資には次の如きものがある。

輸出

鰊粕、鰊粉　越後、大阪、四国
身欠鰊、鯡、塩鮭　東京、両毛、三越

輸入

米　新潟、伏木、酒田、青森
塩　竹原、三田尻
酒　大山、大阪、越後
正油　新潟、酒田、青森
縄、莚　敦賀、酒田、伏木、津軽

これによれば輸出したものは原料品と言つて良く、輸入したものは大体において生活必需品である。明治五年五月に従来手宮港と称していた所へ正式に小樽港と改称し、開拓使の保護干渉により、明治十三年頃迄にその基礎を築いた小樽港は、これまでの時期を保護政策時代とでも称すべであろう。この後十五年の蒸気船関利用を一エポックとして、明治二四年頃までの鉄道開通時代に入り、小樽港はこれにより一段と発展を遂げるのである。

明治十九年、北海道庁が設けられ、移民保護、末開地払下げ規則の施行（後述）の悪弊、利得が生れたであろうと想像される）と共に石狩原野の開発は著しく進み、従つて小樽港はこの地を hinterland として有利な地位につき、明治二二年より特別輸出港に指定された。こゝに至り小樽の地位はゆるぎもないものとな

った。

これより先に小樽・札幌間の鉄道開通がある。鉄道開通以前の交通は、札幌・小樽間の陸上道路が、小樽・銭函間で険阻なために行客が利用するのみで大量の物資は石狩川を利用して札幌に運送されていた。即ち慶応二年（一八六六）大友亀太郎が石狩川より伏古川を通って大友堀を開き、明治二年、これを拡げ、更に同七年に改良して現在の創成川となし、船運の便をはかり、後明治六年に陸路が銭函・小樽間に通じた後でも石狩・坂戸は札幌の外港として活躍した。

この水運を排除して、鉄道を開通した動機中には、当時の産業、米人クロフォードの建議がある。以下それを略述すると次の如くなる。

一、水路に要する海船修繕費を省く事ができる。

二、再三の車船積荷のための石炭破砕を防ぐ。

三、春秋出水のために運搬時の短縮の不便、及び屈曲甚しい航路に避け難い不慮の災難がない。

四、一ケ年採掘した石炭を夏季中に輸出し尽す事ができ、石炭を倉庫に貯蔵する不利がない。

五、軌道を手宮桟橋に接続させ、石炭、その他の貨物を直接船中に入れる事ができ、鉄道敷設によって他の施設もこれに従って進展する。

六、札幌・小樽間は毎年十一月より四月まで積雪中は殆んど交通が絶えているので鉄道敷設により、この間の運送が可能になり、運送費減少の一助となり間接に地方公衆の利益が増大する。

以上の理由によって鉄道敷設を建議したのである。従って米人クロフォードの建議は小樽港の発展にとって一大原動力となったと言える。

明治二三年より入港船舶の内汽船がその数を増して来た。この頃の輸出入品の品目は次の如きものである。

輸入

米、塩、酒、味噌、正油、縄、莚、呉服、銅、鉄、和洋小間物、紙類、漆器、砂糖、茶、煙草、石油等

輸出

主要品目は水産物で明治十年代に農産物を東京方面に輸出せんとするならば出価輸出の状態であった。明治二二年より石狩原野拓殖の進歩により農産物の輸出が増大した。

大豆、小豆、豆類、菜種等、材木、マツチ軸木、皮類、ビール、

又石炭については、明治十九年チーフーに初めて海外輸出をし、二十年より上海、香港、シンガポールに輸出した。国内輸出は毎月行われていた。

（単位円）

	14	15	16	17	18	19
輸出	1,093,944	874,826	1,339,917	587,097	627,046	823,278
輸入	1,469,413	1,278,960	2,435,807	981,668	1,134,718	1,324,250

	20	21	22	23	24	25	26
輸出	706,493	1,379,475	1,527,939	1,281,825	1,935,447	1,722,779	3,112,411
輸入	951,046	1,220,860	1,424,082	9,254,382	6,271,687	5,491,704	7,319,130

	27	28	29
輸出	3,991,644	5,449,547	1,076,294
輸入	9,180,372	7,567,202	3,575,583

— 東海新聞 —

小樽港沿革史 —

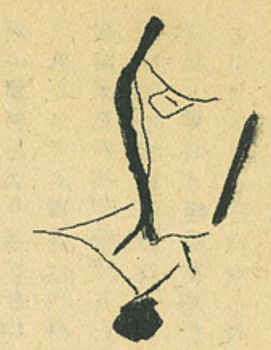
この表では輸出入共にその変動が著しいが、その原因は未だ調査していない。

明治十九年より農産物の乗荷は小樽に集り移民の開墾力も増し、市況が活発となった。明治十六年に鉄道が札幌内金山に開通し、石炭通過量も増大した。明治二二年より特別輸出港となり、二七年より日露、朝鮮との貿易により貿易貨物量も増大の一途をたどった。

かくして小樽港は石狩原野を背景とし、札幌と密接な関係をもって出発したのであるが、はたして現在はいかなる状態にあるだろうか。

札・樽間の経済提携が今更の様に叫ばれる様ではその協力ぶりも思いやられる。現実に立脚した正しい現状分析が港湾関係者にとってラン頭の急務であろう。

— 以上は昨夏経済地理のレポートの一部として調査したものである。



〈詩〉

『僕の視覚の元フォルメが凸

高木 脩

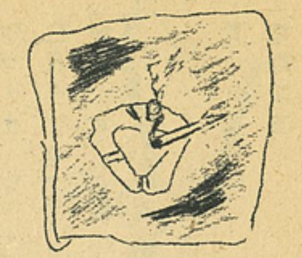
あ――。あゝ。
ダルな朝だ。
僕の朝――。
あの音は？
時計？
ウルサイ奴、しかし
親友さ。
〝死〟への案内者、
反復性同一言語唱導病。
そう。それもよかろう。
僕が
〝時間〟という悪党との
腐れ縁を……、
〝良心〟というピエロとの
取き合いを……、

それから
〝――〟という神。
こいつらとアデューして、
悪魔の手から
与えられたもの。それは
〝肉体〟。
弱女だった。僕は。
だから、ほら
ADIEUといって居るんだ。
〝肉体〟に美魂はない。
あらゆる肉体は
ミュプスターンス・オモジエーヌ。
だから
〝時間〟は一個
〝肉体〟も一個の
ダイメンション。
僕の横の
真白い
くぼみのある
枕のうねりを持つ
〝肉体〟も。
ねっとりした
ねばっく指で

僕の指を捉えて……。
なめらかな
双子山の様な
青白い
乳房へ案内する。
愛の口の
紅白のカーペットは
みんな
持ちさられて……。
動くものが……。（どこに）
動く様に見えるものが。
オ三の丘。
あの丘に掘られた
大いなる暗闇。
そこが僕の棺桶。
僕の埋葬がそこで行われる……。
ウォーイ。ウォーイ。
BRAVO――O！
僕は〝女〟の胸に。
胸に。
肩に。
青いうなじに。
接吻する。

〝女〟は……「――」。
「――」……。

諧着！
動詞の変化は易しくはない。
〝DORMIR〟は……。
こいつは易しい。
僕はもう忘れたけれど。
〝SOUVENIR〟
こいつが一番長い。
あの頃の〝女〟も
……アイボリスラックの髪
……ローズマダーのルージュ。
フーン。なる程。
「赤と黒」って試かい――？
おっともう一つ。
モン・ブランさ。



ミさとの（未完）

守分寿男

〈プロロウグ〉

お前は知っているだろうか、

美しい始めも終りもない街路と
沈黙のうちに白く伸びたウィルティングと
盗い海原を果しない青空と
そして透きとおる二十世紀の恐怖のなかとに
しづかに眠っているその巷があることを。

その巷からある日
行先もなく出航しゆく船があるのを。

ドラが鳴り　ドラが鳴り、テープが切れる
人はいまひとりもいない　そして
時計はもう時を刻まない。

氷のなかで薔薇が永遠の紅いを有つように
そこで時の二針は凍っている。

〈I　色のある夢〉

時を超えた日の出と日の入り
力強い潮の流れに狂言まわしの声がひゞく

〈あまえ　孤独な散歩者を
黄色の空中に屬気棒を変幻し
極光の陰になんじの解答を失えよ

壁のなかの氷
光の中の風、雪の中の光
それは汚れを知らない
夢の中の夢を眠る
人々が気づかないように

私の外で　私を円の中心として
時が過ぎる

私はひとすじの道を歩く　どこまでも
それは続いていたから

そしてその白い道しかなかったから
私はいつまでも歩かねばならない

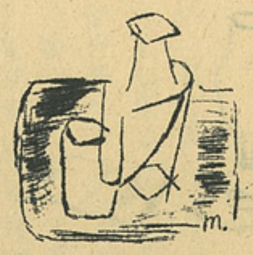
それはおよそ乾いた風景であった
くわえた煙草の煙にまざって
埃が肺につきぬける
―エジプトのピラミットに内蔵されるミイラは
肉のなかの水分を吸収されて創られた

そして心はナイルの水を求めながら
四千年の眠りを眠りつゞけた

私の肉はもう充分に乾きゝって
蝶が蜜を求めるように
紫陽花が雨を求めるように
そして沙漠の街僧人が
オアシスを求めるように
私の心は愛を夢みていた

ルーレットが無心に廻り
私の心のガラス鉢はこんなに
いびつにゆがんでしまった

船の警笛は暗闇をのんざいて消えてゆく
白痴を知る白痴の泪が
どこかで静かにながれるような……

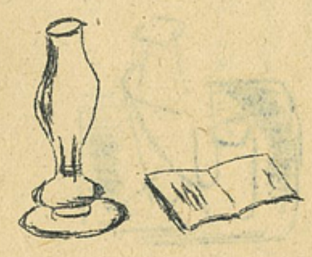


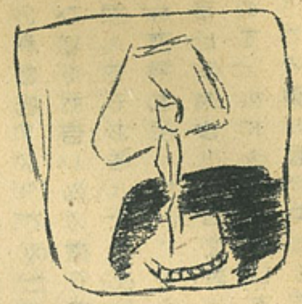
無題

M生

一人でタバコをふかしていると
ふかく〜とした孤独が
寒い程身にしみる
岡の上の運動会の
行進曲のメロディが
まわりの山々から
こだまとなって聞えて来るのも
静かに寂しい。

さみしいと云うのではないが
かつこうを聞いていると
しようじようとして
幼い日のなつかしさが
胸にこみあげてくる。





怪談

Mさんの話

Z生

「それは私が四寮に在寮中のことでしたよ。今左の冗談めいた口調から急に真面目な目つきに変ってMさんは語り出した。

以下はMさんがその時僕に語ってくれた話である。

その出来事は確かに七月十四日の晩であった。S神社の宵祭りというので、寮生はそれぞれ思い思いの方向へ足を下り、寮内は全くひっそりと静まっていた。友人のS君もまたその一人で、他の連中と共に祭りで人ごみの中をブラツキ、とある小さな飲み屋の玄関を くぐつたのは丁度時を少し廻つた頃であつた。元来あまり飲める口でないS君は、口角泡を飛ばして議論をしたり、何やら大声で談笑する一同の雰囲気にも浸る事ができず、たゞ独り浮かぬ顔でその場でも孤独の存在であつた。幾分やけになつたのか、量を過して了つた彼は軽い頭痛を覚え、一同にそれを口実として、ひとり其処を出たのは凡そ一時間程後の事だつた。夏とはいえ、ひんやりとした夜気に暫く触れていると、次第に頭痛も消え去り彼は何とも云えぬ気分になり乍ら、まだ人出もかなり多い公園に通ずる道を登つて来た。丁度公園の入口に当る所で、彼は急に生理的欲求に駆られ、近くの小路を左に折れた。ついそこの、彼が登つて来た道に較べて、その小路は殆ど人通りもなく、勿論街頭の燈も見えなかつた。用事を済ませて戻ろうとしたS君のもろろうとした眼に奇妙な物体の影が映つた。

いぶかりながら近づいた眼にや、はつきりと飛びこん

だのは、眞白な二つのふくらはぎだった。その物体はどうやら女の様だった。一瞬、どきりとした彼の頭脳に閃いたのは何となく不気味な予感だった。後ずさりをしたものの、根が善良でフェミニストであるS君には、それを見過してアうことはどうしても出來なかった。それに、もしも、というある種の可能性を心に描いたのでもあろう、意を決した彼は、恐る恐るその女らしきものに近寄った。その影は何かに苦しんでいるらしく、冷い地面の上にうつ伏せになり、苦しげに肩で荒い息づかいをしていた。彼の足音にも気づかぬ様子であった。S君は暫くの間、如何にしてよいやら茫然と美しく露出した素足に眼をとめていたが、とうとうその肩にこわごわと軽く手を触れた。「もし〳〵、もし〳〵。」と声をかけたが、その声は途方もなく調子外れなかん高いものであった。女は顔を上げようとはしなかった。彼は自らを落ちつけて再び声をかけ女の肩を揺すぶってみた。「もし〳〵、もし〳〵、何かひどくお苦しみの様ですが……。よろしかったら、お家へでもお送り致しましよう。」彼は出来るだけ丁寧な言葉を使ったが、その時彼は自分が酒を飲んでいる事に非常なひけ目を感じた。女の顔がかすかに動き始めて、かぐみこんでいるS君の顔をゆっくり見あげた。その顔は闇の中にも抜け出る様に白かったが、苦痛にひきつっていた。「僕がお送りしますから肩におつかまりなさい。」見上げた射る様な眼を凝視出來ず視線を白い足の方に外らしながら、彼はおど〳〵しながらそう云った。着物の様子は、暗闇ながらも決して下品な所が無い様だった。髪こそほつれてはいたが、美しい顔立ちだった。彼よりも四、五才年上、良家の若奥様、或いはまだシングルだったかも知れないが、S君にはその様な事を見てとる余裕も、観察眼も、勿論持ってはいなかった。彼はただ、心から女を気の毒だと思いこんだ。彼の眼をじっと見つめながら、女は口を開いたが、凍れて出た声は、辛うじて聴きとれる程の、而も陰気な音調だった。「どうぞ水を一杯汲んで来て下さい。あなたは親切な方ですわ。」彼は反射的に立ち上り、公園へ駈け登った。そこには、公衆の為の飲料水が、絶えず小さな蛇口よりちよろ〳〵流れ出ている場所がある事を彼は思いついたのだった。その根元に鎖でつながっているアルミニュームのコップを、彼は力をこめてもぎちぎり、それに一杯水を汲んで、しど〳〵と、女がどうしているかと気をあせらせながら、元の場所へとってかえした。少なくともその時の彼の行動は、気の毒な女を救おうという義侠心の現れそのものであった。然し、戻って来た彼の眼には、女の姿はおろか、犬ころ一匹も発見出來なかった。

ものの一、二分の間に、病める女は忽然と姿を消し去り、後にはただ黒々と延びている道路、漆の様な闇、冷えびえとした夜気が残っているのみだった。

Mさんの話は、どうやら本格的な怪談口調となる。新しい煙草に火をつけながら、更にMさんは続ける。

一時は茫然として立ちつくしていたS君に、またもや先程感じた不気味さが襲って来た。それは先程のよりも一層強く具体的な形で現れて来た。彼はもって來た水の入ったコップをその場へ投げ捨てたが、そのカラン〳〵という音が、あざ笑う様に、そしてますます不気味に彼の神経を刺戟した。その音に追いかけられ、彼は狂気の如く家へ逃げ帰り、ようやくベッドに落ちついた。然し電燈を消して後も、彼の頭には、意外にその出來事がこびりついていて離れなかった。彼の眼を射た足の白さ、苦痛に引きつった白い上品な顔が、暗闇の室内に浮かびあがり、彼を悩ませた。柔かな肩の感触、かすれた低い声、そしていまわしいコップの音、と次から次へと頭が廻転するうちに、彼はいつの間にか眠りに落ちて了った。

どのくらいたったろうか。何かの音にハッと目を覚した。丁度今は物置きとして使用していた玄関の右側、階段の直下の部屋がS君の部屋であった。その音は極くかすかで、誰かが前の廊下を通り過ぎる足音であった。それはいつも聞く友人達の様に荒々しいものではなく、静かな、引きづる様な調子であった。足音は突き当りを右へ曲って、一番奥の十二号室の前でぴたりと止った。約二三秒間の静寂が流れた。やがて低く呟く声が聞えた。「あゝ、此処ではない。」そのかすかな呟きはS君にどんなに大きくひびいた事だろう。それはまぎれもなく、先程の苦しげな女の声であった。背から冷水を浴びせられた様にぞっとして、彼は思わず恐怖に青ざめ、ふとんをかぶった。その時逃げ出せば逃げ出す事も出來たであろうが、多分、彼の全身は硬直して身動き一つ出來なかったのであろう。

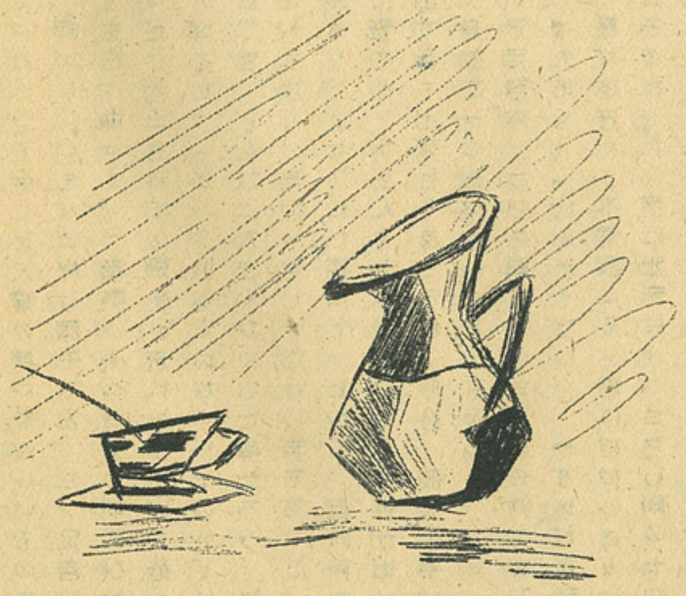
次いで足音は、こちら隣りの十三号室の前に立ち止った。また呟く。「此処でもない。」かすかな足音に、うめく様な呟きが、不思議にもS君にはは〳〵きりと聞きとれるのだった。更に足音はよりこちら側の十四号室の前へ、それと同時に呟きも次第に近づいて来る。五つ目の部屋の前でも同じ事が繰り返される。女は遂に六番目の部屋の前へと訪れる。それはS君の部屋である。不気味な沈黙の瞬間、今度は如何にも感動に満ちた声で女は呟いた。「あゝ、こゝだ。」その声が終るや否や、S君の部屋から、まるでこの世のものとも思われぬ絶叫が夜の静寂中にひびき渡った。遂にS君は発狂して了ったのだ。

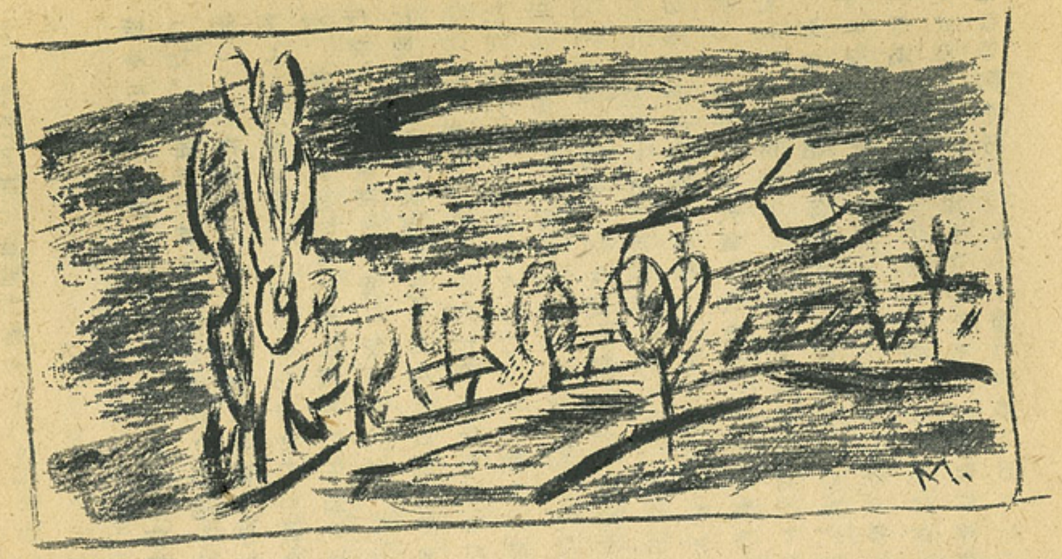
「その後S君がどうなったかは誰も知らないぞ」と附け加えてMさんは話を終えた。だがMさんはどうやら、その結果を知っている様に僕には思われた。それに、何故こんなに詳しくその夜の出来事、その夜のS君の事についてMさんが知っているのか疑問だった。きっとMさんは、その結果について触れたくなかったのだろうと考えて、僕も敢えて問うのをさし控えた。

話によると、とにかくS君は真面目な、純情な青年であったらしい。然し、内気で、神経質気味な点があった事も否定できない。普通の人間ならば、路上に女の酔いどれが眠っているのだろうぐらいに考えてそのまゝ、見過して了ったであろうものを、真面目なS君にはそうする事が出来なかったのだ。人一倍こまかな神経を持っていたS君であった故に、かゝる悲劇が生じたのではあろうが、その相手が君しも男であったならば、かゝる結果にはならず済んだであろう。ひょんな機会に、相手が女であるが故に生じた悲劇である。

然し、この出来事はMさんの在寮時というからには、もう二十数年も以前の事である。だが殆んど総ての寮生が、それぞれガールフレンドを持ち、ダンスを楽しみ、女の何たるかを熟知している今日に於ては、女について全く無知であったS君のこの舞をくり返す者は二人と居ないであろう。即ち寮にはもう、二度とこの種の怪談めいた物語りが生れることはない。

たゞ、気の毒なのはS君である。S君はその晩、飲みに出ずに、勤勉に寮の中で学問をしていたならば、その女に会う事もなかったろうし、ましてや発狂するなどという事もなかったであろう。勤勉こそ悲劇の発生を防ぐ武器となるものだ。僕にはそう思われてしかたがない。





燕

福原蓮一

「令二さん、あれ燕が今年も来ましたよ。」と呼ぶ母の声に、令二は縁側から下駄をつっかけて三十坪程もある灌木のきれいに生えた庭え下り立った。南側の書斎の軒下に二羽の燕が忙しそうに藁くずを持ち運んで来ては巣のまわりで飛び交っていた。ひさしの長い軒下に八寸四方の燕の巣がうちつけてある。丁度昨年の今頃であったかひどい雨が降り続いたあげく三十年にもなる書斎の窓側の屋根がもり始め大工をたのんで直せをした時、何時の間にか出来ていた燕の巣が手荒な大工の手でそうさもなくこわされてしまったのである。丁度それをみていた令二は遊びに来ていた千恵の提案で巣箱を作ろうと思い立ち手近にあった木切を大工からもらって巣箱を作り新しく出来た書斎の軒先に打ちつけた。

千恵は令二の友達三の妹であった。白いワンピースにブルーのスカートを身につけた千恵が蔵にたえぬ赤子で巣箱を見上げながら「さあ、これで燕にも平和なお家が出来たのね」といって令二に向って微笑んだ。あれから数年、令二は庭先に立って千恵の微笑んでいる

姿を夢見る様に業績を眺めていた。

（二）

塙令二は北海道の日高の山田村の小学校長の息子であった。汽車で一時間半ほどもかゝる居小牧の高校を卒業し、高校時代から希望の東京教育大学に入学した。烈しい希望と野心に胸ふくらませている令二の脳裡には、新しい都会での活気に満ちた生活がめまぐるしく行交うた。家族の人達や友紧三のにっこり笑った顔々に見送られて故郷を去った令二は都会での学校生活に入った。静かな地方の村に育った令二には都会のせきたてられるような騒々しさと人の動きに疲れながらも新しく出発した毎日の生活の中に何か心の不安を感じつつ坦々たる毎日の生活が続いた。彼は大学という新らしい世界に大きな期待と夢をもっていた。半年前迄の高校時代の唯一の夢でもあった。それだけにやがてやって来た心の失望も大きかったのである。残っていた心の一端がそうした失望が糸口となって、みる〳〵うちに破れ始めるのを令二は感じていた。それは今迄令二の心を支配していた考えを押しやぶるに充分なものであった。令二にとって胸をつくものは一生懸命捉えようとして追求していたものが眞実には存在しない単なる影であったという強い実感であった。どうにもならない心の沈潜にあがく令二の心は故郷にいる友春田紧三の事を思い出していた。優秀でありながら、進学の機会をあれ程求めていながら、それきりになってしまった彼。令二が合格した時羨望の目すらみせず心から喜んでくれた彼が崩れゆく心の支柱の中から一言もいわずか寂くみつめているのを感じた。合格夢に酔い羨望のまなざしに酔った令二には今迄片隅に消えがちだった彼の姿が大きく押迫って不安な心を支えてくれる予感があった。時々くれる簡単な葉書の文面には令二の近況を尋ねる外にはいつも彼の地味な生活の計画と実践の力強さがひそんでいた。そして何よりも令二の心を引きつけるものは意識しない彼の明るい生命力と彼独自の生き方であった。村から三里も離れた電化されていない未文化の部落に彼は子供達と笑っていた。一言々々の話の端にかくしきれない自然な善良さが溢れ出ていた。彼の話振りはまるで自分自身を納得させるかのように飾らないとつ〳〵としたものであったが押しつけがましい雰囲気はみじんにもみられなかった。そこには不断により良い自己の姿を求めて未来の世界を現実の力強い行動力によってかち得ようと前進を続ける少年の様な無邪気さと烈しい活力が満ちていた。

（三）

余裕のない塙の家ではとかく令二への送金も十分でなかった。度々の休暇も令二は色々のアルバイトで過ごさなければならなかった。

入学以来二年目の夏季休暇は久し振りに帰郷した令二は故郷の山々をしみ入る様に眺めるのだった。東京の蒸し暑い毎日に較べて北国の日高では冀に日が入り始めるともう涼しい夕風がゆかた着のはだに入り込んでくるのであった。令二は紧三が今日御園部落から帰って来る事を母から聞くと晩食後の日射の烈しい田圃道を麦わら帽子でさけながら川沿に遥か見える紧三の家に出かけた。

春田の家は村の郵便局の集配人で母と妹の千恵、弟の達三の五人暮しであった。つましい毎日の生活の中からも両親の切なる願いと努力によって高校を卒業した紧三は御園部落の分教場に助教師として勤め、今では彼より三つ年下の妹の学資を補いながら家計を助けていた。

一時を過った田ぼ道は暑さが一きわで令二の額からはしたたる様な汗が流れ出ていた。やがて川沿から二十米程の所に二十坪程の春田の家が松に囲まれて軒先だけをのぞかせているのが目に入った。令二は裏の納屋の前縁側を見通しながら「春田君、春田君。」と二度程呼んだ裏庭の柿の葉蔭でセミがジイ〳〵と騒苦しく鳴いていた。人のけはいもしないひっそりとした縁側にどかっと腰を下して、令二は麦わら帽をぬいで汗をふいた。太い縁側の柱に残っている紧三と令二の幼い頃の落書がなつかしく目にとまった。

その時パタ〳〵とわらじの音がして紧三の弟の達三が「やあ令二さんだ」と叫びながらなつかしそうに走り寄って来た。体も一廻大きくなって見るからに頑丈そうな達三の姿は紧三の体に似ているのは驚くばかりであった。「おや！達ちゃんか、あんまり大きくなったんで兄さんかと思った。そう〳〵もう中学三年生だものね。……所で兄さんは。」「まだ帰らない、でももうすぐ帰ると思う何時でも来る時はお晝過ぎだから。」とその時背の方に人のけはいを感じた令二が振り返ると千恵がにっこり笑って静かに頭を下げた。絣着に袴に登んだ瞳をくっきりと大きく開いて、なつかしそうに、でもひどく驚いた様な眼だった。大きな麦わら帽からほつれ毛が数本のぞき日に薄赤く上気した頬が心持ちふっくりと可愛らしかった。

「御無沙汰しました。紧ちゃんが今日帰ると聞いたもんだから早速やって来たんです。」立上りながら令二はまぶしいものでも見るように千恵に向って一気に言った。「まあ、せっかくいらっしゃったのに……」でも

もうすぐ帰りますわ。二時頃迄にはいつも来ますから。さあ、どうぞ、そのまゝ縁側からお上りになって……」すらりとのびた千恵の容姿は若鮎の様にぴち〳〵としした感を一杯にたゞよわせて、どぎまぎした眼でちらりと令二を見上げながら縁側に体を寄せてうながした。

「え、……　何だか変だな。すっかり千恵さん他人行儀になってしまって、それに綺麗になって……」「まあ……そんな、令二さんは東京に行って口が達者になったのね。」　麦わら帽がぐっと大きく傾いて千恵の上気した顔がぽっと赤くなった。「姉さん、おなかがすいたなあ、御飯出して。」　達三の元気な声に千恵は心持ち頭をさげて裏口の木戸から小走りに消え去った。二年前まだ子供だったおさげの千恵の姿がふっと頭に浮ぶと、たった今立ち去った女らしいのび〳〵と美しく成長した千恵の姿におり重なってふっとほの暖かい錯角におそわれた。

（四）

久し振りに紧三と話し合った令二は、彼のたくましい男田気に単純な心の興奮を味合いながら尋ねられるまゝに東京の生活の一端をぽつり〳〵と話し始めた。以前紧三の室であったこの室は今では千恵の室となっているらしく窓辺に風鈴が時々生暖かい風にゆれて涼しい音をかなでた。きちんと整理された机の上にはグラジオラスが活けられ、清楚な千恵の男田気をたゝえていた。「ねえ、紧三、千恵さんがこの室の住人となってから部屋も綺麗になったなあ。お前の時はひどかったぞ。」「あ、どうも千恵のやつ綺麗好き過ぎるから俺だけ目立つんさ、俺だってこれで案外……」「まあ兄さんたら、お花等いくら生けてあげたっていつも灰皿みたいに花びんに灰を入れていたでしょう。大声の兄の声が耳に入ったのか千恵は赤くうれた西瓜をのせた皿を両手に部屋に入りながらやり返した「こら、余計いな事を言うな。」　紧三は頭に手をやって所々大笑した。「千恵、久しぶりの令二君の話しだも、すわって聞けよ。」「えゝ、令二さん、いゝ」と千恵は令二に微笑んだ。「いや、そんなにあらたまって言われたって何も……　それより紧三君の先生生活一端を披瀝してくれよ」側にそっと座った千恵を意識して、令二は紧三に助けを求めた。然し何時か話がはずんで来ると、うちわを動かす手も止って令二は過ぎ去った二年の東京生活を追ぬていった。千恵が目立たぬ様に静かにうちわを動かしてくれているのをふと気づいた令二は千恵の心遣くしを心から嬉しく感じた。

五

北海道の夏は短い。盆に入るともう涼しい風がかすかにしのびこみ木々の葉擦れの音にも何か秋の訪れをしのばせている。夕暮町の山陰はと時ともなれば早暗い陰を宿して虫の音が夏の終りをかなで始める。

盆に入って二三日たった或夕方盆太鼓に誘われて暗い夜道にふらりと出た令二は何とはなしに春田の家に向っていた。シベリヤ川は月に照らされてきらめき川辺の木々が黒々とその影を落していた。虫の音が一せいに出揃って夜風が生暖かい令二の頬をなぜた。細い田圃道を越えて右辺の堤の上の小道から春田の家はずっと近かった。令二の足はそちらに向いていた。小道を歩いている人影が令二の視野のはずれに映った。

雲間に一時かくれた月が寂しい青みがかった光をさっと走らせて黒い人影を堤上に浮び上らせた。令二の目はとっさに「千恵さんだ!!」と直覚していた。「千恵さーん」　令二の声が夜の空気にふるえると黒い影がぴたりと止って水影に身を寄せる様に直立した。「千恵さーん!!」　令二ですよ!!」といってかけだした令二の耳に「まあ……」と驚きと安堵の溜息がかすかに入って、千恵がこちらを振向く姿が美しく目に入った。「驚きましたわ。心臓が上るかと思う程、まだどきどきして……」　と胸をおさえ　千恵の目は令二の胸もとをみつめていた。「御免なさい。突然声かけたりして、千恵さんだなと思ったら思わず声が出てしまって」　面映ゆいような顔を無理にほころばせて令二はそっと千恵の姿をかいま見た。ゆかた着の千恵の姿は月に照らされて静かな堤上に美しく浮びまばゆかった。「紧ちゃんいる」　「いゝえ」と首で盆踊りをみにいきましたの。私も行ったんですけれど……　少し疲れたものですから、先に帰って来た所でしたの。でも、もうすぐ皆帰りますわ。切角いらしたのですから。どうぞ寄ってって下さい。「えゝ、それじゃあ」と云って二人は並んで千恵の家に向った。令二は千恵のゆかたが時々かすかにふれると何かじいんと胸痛い感情におそわれながら、うつむき加減にゆく千恵の横をちらっとみやるのだった。令二は今度帰郷して千恵に会った時、乙女らしくのび〳〵成長した彼女に、もう幼い子供の様な感じを持ち得なかった。一つ〳〵の動作に女らしさがあふれ、温和な遊び仲間だった数年前の彼女に対する令二の気持は既に言いしれぬわだかまりがあった。千恵も早くもそれを感じていた。お互いの心は二人の年の知らぬ間に一人は男性として、一人は女性として立派に生長していたのだ。令二は千恵静かな明るさに引きつけられていた。千恵の態度にはいつも

影がなかった。千恵もにくまれしく成長した令二の落着いた態度に何か心が引かれていたのであろう。

二人で歩くのはお互いに初めてであった。今迄の二人であったら心置きなく何でも話し合う事が出来たであろう。しかし今の二人にはふれ合う事を恐れる何か叫ばいていた。それでいて話したい気持が強く二人の間に迫っているのだった。裏庭の木戸口を通って縁側に座った二人はじっと空を見上げていた。空一面にちりばめた宝石の様な星が点滅し、月が青白く二人の面を照らしていた。涼しい風がそっと頬をなで千恵のほつれ毛をふるわせて過ぎ去っていった。「千恵さん疲れたんでしょう。遠慮せずに休んだらどう。僕なんか、かまいやしない。」「いゝえ、そんな、暑くて眠れませんし、こうしていた方がずっと……」千恵は令二の眼をおどろいたように見つめて、そういった。「僕は今度こちらに帰って来てつくづく思ったんですよ。故郷はいゝなあって。都会人のあの共通した性格――愛そうのよい、それでいて心の底には傲慢な所体がぶった態度――全部が全部と言うぢゃないけど。あれが僕には耐まらなかった。故郷に帰って一番先に感じたのは感情の自然って言うか、こだわりのなさだった。だから紫ちゃんに会う時だってそれだけでもう嬉しくなってしまった。只のセンチメントかも知れないけど」「でも兄はいつも言っておりましたわ『田舎の単調さの中にともすれば眠ってしまいそうな理性の目をいつもさましてくれるのは令二君だ』って。此の間も令二さんから送っていただいたタウトの「科学と空想」等非常に故之られた日本」やティンダルの「科学と空想」等非常に故之られたって。だからお前も読めって盛んに奨めていました。学校の授業だけにしがみついている私達女学生には是非もっと広い読書の範囲が必要なんですね。兄も私も令二さんの様なお友達を持っているなんて本当に幸福だと語合っておりますのよ!!」「何だか恥かしくなってしまうなあ……」と令二は面映ゆかった。でも千恵がそんなに思ってくれるだけでもたまらない嬉しさが胸一杯になって千恵を思い切りだきしめてやりたい衝動にかられるのだった。

夜更けの闇を通して響く盆太鼓の音が二人の心を軽くゆすぶっていた。「もう遅くなりますから僕帰ります。明晩帰京しますから、紫三君に是非一度遊びにくる様伝えて下さり、千恵さんもね」「まあ、もうお帰りになるなんて、きっともうすぐ帰りますわ」立上りかけた令二の顔を何か訴える様な悲しい目でみつめながら千恵は身を前に倒すようにして叫んだ。「行かないで。」令二はその目がそう烈しく求めているのを感ずると令二の帰心を強く押えた。烈しい感情の波が

同時に堰を切って令二の心をゆすぶった。令二の眼は烈しく千恵の体を包んだ。暖かい千恵の顔が令二の胸に押しつけられるとその感触を通して令二の心はやわらかい絹に包まれて目頭から熱い涙がぽろ〳〵と流れた。感動にふるえる千恵の体が令二の胸もとに烈しく伝わり千恵の熱い涙がはだにしみ通った。遠くひゞく盆太鼓の音は二人の心を軽くゆすぶり千恵の手は令二のたくましい手にきつく握りしめられていた。涼しい微風が涙に濡れた二人の頬を撫ってくれるその様にそっとふれ二人の心に時の経過を知らせた。

六

夏休みも終って帰京した令二は千恵の事が気にかゝって落着かなかった。上京前駅頭に紫三の明るい顔は見えたが千恵の姿はみえなかった。令二の心は烈しく動揺していた。平和な乙女の心にはしなくも風を巻きこんだのは俺ではなかったか。お前は紫三に一言でも千恵の事をたのんだか。令二は紫三に自分の心を打明ける気持に迫られていた。

令二より紫三へ

紫三君、上京以来三日、君に打明ないで別れた僕の心は苦しい。今になって手紙で告白する僕を許してくれ。僕は千恵を愛している。一時の気まぐれや不真面目な気持からでない。今後の事もよく〳〵考えている。千恵さんには僕の心は通じています。千恵さんの兄として君が二人の愛を喜んでくれる事を祈るばかりです。色々書きたいが乱れた今の心は只同じ事をくり返すだけです。御両親様にもどうか君任身からお話しして下さい。千恵さんには君の返事を待った上でお便りします。返事をお待ちします。

令二拝

紫三より令二へ

令二君　君からの手紙を読んだ時、実際の所あまり突飛な事で驚いている。幼い頃から交って来た君の事だ千恵を本当に愛してくれる気持はよくわかる。俺は君が千恵を愛してくれた事を感謝している位だ。しかし令二君の烈しい情熱はもっと理性で抑えるべきだったんだ。この一週間千恵の元気のないのには気が付いていた。君の手紙をみて俺ははっとしたんだ。今の千恵には君の愛は荷が重すぎる。千恵は素直に「君を愛している」と俺にいってくれた。でもその時の千恵の苦しむ姿がいじらしかった。今迄冷静だった千恵の心は君の情熱の大波に一枚の木の葉に揺り動されている。今では君の一言一句が千恵の心に光であり、苦しみであり、若しみであり、喜びなのだ。俺の力ではどうにもならないのを感ずる。令二、友として千恵の兄としてお願する。やさしい愛で千恵を包んでやってくれ。

として地味に根気強く千恵の心を育てっやってくれ。
両親もそう願っている。明日御園御者に帰る。再び幼い子供達との生活がはじまると思うと楽しい。お互いにしっかり自己の生活を確立していこう。千恵からくれ〳〵もよろしくとの伝言です。東京の地に千恵のべはとんでいるらしい。

令二より紫三へ

有難とう。有難とう。君からの返信を受けた時俺は信じてはいた。でも恐しかった。その宣告が、でも今は有頂天だ。恋は人を単純にしてしまう。千恵さんの澄んだ瞳が俺の心をしっかりとつかまえてくれているのを感ずる。千恵の心に嵐を吹きおこした事には十分責任を感じます。でも安心して下さい。君の期待にそむかない様努力します。僕は常に自らに言いきかせている。もっと〳〵理性的でなければいけないのだと。千恵さんとしっかり愛を創造していく積りです。御両親によろしく

令二拝

千恵さん　貴方と一番にはね廻りたいような嬉しいお便りをお兄さんからいただきました。僕達は皆に祝福されている。庭辺の風鈴が今日に限って、千恵さんの愛の歌をかなでる。

せっかちな僕の心は冬休みの雪に覆われた故郷の、そしてあの千恵さんの家を思い浮べている。すっかり裸になった桐の木の下で、千恵さんと二人で手をまるめあって千恵さんの息が僕の手を、僕の息は千恵さんの手を「ハアー」と暖め合っている。……「チリンチリン」と風鈴が間抜けな僕の心を突ってなりやがった。ふと気がつくと額からも体からもじわ〳〵と汗が出ていた。まだ東京は夏なんだ!!　下宿の小母さんが入って来て机に頬杖をついてぼんやりしている僕に、「何をそんなに楽しそうに考えているの。」だって……今日の僕は人に語かくせない程、恵比須様の様にニコやからしい。千恵さん知っている?　「ふと何処よりともなく君が声す、百合の花の匂のごとく君が声す」佐藤春夫は僕達二人の為にこんな素晴らしい詩を作ってくれたんだ。二人だけの詩。僕等の為の詩、千恵さんの声が僕には聞える。そうだ百合の花の様に心の底までじいんと匂ってくるんだ。千恵さん、僕達は学生だね。二人には学問の道、そして烈しい現実の道がある。お互に心の底までうちとけ合って愛の行進をしようね。僕は兄さんに誓った。理性的に「愛に溺れずに千恵さんと愛を創造する」って。毎日の生活にこんな充実感を感じるのは初めてだ。総てが千恵さんに直接している様に感ずる。千恵さん、お休み、静かに、平和に

令二

千恵さんへ

令二様　今日確かに、この手に貴方のお便りいただきました。この二週間貴方のお便りを待ち続けていた千恵の心を御想像下さいませ。日高の山々にも秋風が吹き始めました。庭の桐の木が時々さわ〳〵となり貴方のお帰りをお待ちしております。千恵は貴方のものです。貴方の血となり肉となるために、千恵は一生懸命頑張りますわ。令二さん、今日、学校で国語の時間にダンテの神曲の一部を先生が御説明なさっている間にふと貴方のことを思い浮かべてぼんやりしていたら突然指名されて……何を尋ねられているのかちっともわからなくて、まるで皆んなに見すかされたみたいでひどく赤面しました。「そんなことじゃいけない」って叱られそうね。えゝ、確かにそうなんです。でも千恵の理性は時々貴方の愛でかくれてしまいそうになるの、だけど千恵は今日、はっきりと心に決心したんです。「愛に溺れない」って。令二さんの言葉「愛の創造の為に」……

令二さん覚えていらっしゃる?　貴方が高校生だった時、令二さんのお家の軒下に作って下さった「竹の楽」――貴方は一生懸命になって可愛い〳〵楽箱を作りあげましたわね。今度は私達の楽をもっと〳〵長い間かゝって、もっと素晴らしいものを作りたいなあ……まあ令二さんは笑っていらっしゃるんだわ。でも本当よ。本当に真剣に考えているの……兄が帰る時、私の顔をじっと見て「千恵、冷静に考えることを忘れちゃいけない。今のお前にはもっと勉強する以外にないんだ」って。私、何も言えなかったの。皆んな親身になって私達の事考えて下さるんだもの。令二さん。今何していらっしゃいますの。きっと机に向って風鈴の音を聞きながら勉強していらっしゃると思います。令二さんの好きな詩、千恵もとう〳〵覚えましたの。兄に教って

"How sweet the moonlight sleep upon
this bank! Here will we sit, and
let the sound of music
Creep in our ears"

夜も大分更けたようです。お名残り惜しい気持を無理に抑えて、では今日はこれで

"Good night, good night!
Parting is such sweet sorrow,
That I shall say good night
till it be morrow"

兄々もお体に気をつけて御勉強の程お祈り申し上げま

す。

令二より千恵に　　千恵

千恵さん貴女のお便りの一言々々が身にしみるように嬉しい。千恵さんがあの「ヴェニスの商人」のせりふの一節を覚えてくれたなんて素敵だな。それに終りの"Good night Good night"…… なんてジュリエットと千恵さんが一緒になって胸が一杯だった。お返しに僕もロミオになって千恵さん＝ジュリエットに捧ぐ

It is the east, and Juliet is the sun
…… Her eyes in Heaven
Would through the airy region stream so bright,
That birds would sing and think it were not night.

東京もよう〳〵秋が訪れ始めました。それなのに僕の心は春の様だ。本当に驚く程毎日の生活に張りがあるんだ。今日神田で千恵さんにと思ってロマラ・ロランの「ジャン・クリストフ」を求めましたから早速お送りします。ロランが全力をあげてとび込んだこの創作の流れのリズムの中に僕は知らず〳〵に作中に無すまゝに流されてしまうのを感じます。「死ぬ運命を持つ総てのものに――平等を与え、平和を与える死に――生の無数のせゝらぎが流れ入って融け合う未知の海に、僕はこの作品と私自身を捧げる」というロランの心は、「知性、愛――それは、生と前と後との二つの深淵の間で吾々人間の間を照らす唯一の灯光である」という強い確信をひしひしと身に感ぜさせられます。千恵さん「永続的な唯一の幸福は私達が互に理解し合う事によって互いに愛することだ」というロマンの言葉をかみしめて、僕は千恵さんによりよく理解してもらう為に努力します。僕の世界は千恵さんの世界にも建っているんだ。千恵さん、ではお休み。皆様によろしく

令二

数多い烈しい感情の流れが毎流のように通う――これが二人の心を継ぐ愛の手紙であった。二人は離れていればいる程、心は身を沸るわす程求めていた。唯一の細い道を流れる愛の涙流を支えきれなくなる不安を感じつつも、二人は共にお互いの温い愛の衣につつまれていた。しかしそれは令二の世界にも千恵の世界にも残る一部が吐露されるに過ぎなかった。千恵も令二も語り合う間の喜を、相見透す眼の光、其の底には確かに暴風のひとんでいることを直覚していた。それは恐怖であり、ぞくぞくする喜びでもあったのだが：

（七）

千恵の手紙が来てから丁度二週間目の或る爽やかな朝、庭先に立って朝食后の一時をいこっていたとき、令二宛の電報がとどいた。令二の心はとっさに「千恵さんがもしや上京を…」とときめく感情を味っていた。――有りうべきではない――それでも尚そう直覚する程令二の胸石は千恵にひきつけられていたのであろう。電報は確かに故郷からのものであった。しかも緊三からの…

「チエキトクスグ　カエレ　キンゾウ」　馬鹿な!!　そんなことが有るものか、絶対にない。自分がどうかしている。と握りしめた紙片の感触から令二は背すじを走る寒感が鋭く脳裡をえぐった。どす黒い不安の渦が必死になって払いのけようとする令二の心の間隙を絶え間なく押寄せて来た。令二は心の安定を失っていた。どうして下宿先を出、どうして故郷に向けて発車する列車にのったのか…

只、千恵の叫びが、千恵の燃える瞳が、令二に向けて救けを求めている。悲しい不安の影に悪鬼が笑っている…　走り行く汽車は絶望と一緒の希望をのせてすっしぐらに北へ北へと進んでいった。

故郷にたどりついた令二は惨憺しきっていた。鋭く光る眼だけが烈しい心の斗争を物語っていた。出迎えに来た母と緊三の姿をみた時、令二の感情は最早心には蔵しきれなかった。あふれ出る激情の炎がうなっていた。「千恵は?」　すがりつくような眼で母の、そして緊三の眼を求めた。大粒の涙が母の眼にも緊三の眼にもあふれでた……。

夕暮の長い影が部屋の中に深く入り込んでいた。窓辺にのべた寝床へさし込む淡い日の光の下に白い枕の上にのっている青白い血の気の失せた千恵の顔があった。崩れるように座った令二の眼を千恵の眼が静かにみつめていた。それは令二を一目でも見得た安堵の眼だった。「千恵さん!!　千恵さん!!」　寝具の端をさけび程烈しく握りしめて令二は身もだえした。「死んじゃいけない。」　溢れる涙が千恵の頬に落ちてきらりと光った。令二の眼は千恵の総てを心の奥底に刻みつけるように一時も千恵の眼から離れなかった。烈しい呼吸が千恵の胸を波打ち、熱にかさかさになった千恵の唇がかすかに開いて何かを語っていた。一言でも聞きとどけようとする令二の手が烈しく千恵の手を求めて蒲団の中に手を入れると千恵の指先は既にひやりとする冷い感触をたゝえ、令二の心臓に鋭い絶望の一槍を突きさした。かすかに動いていた口唇がぴたりと停って高い胸のうねりが静かにおさまると、千恵の顔はくつろいでいた。烈しいおえつが室に高まると令二は初めて千恵の死を身に感じた。「千恵は死んだ」　すっかり日の落ちた山際の夕闇が室中を覆い始めた。

（八）

千恵の病は急性肺炎であった。病を知らなかった千恵の肉体は一瞬の秋の花を令二の心に咲かして、またたく間に散り去った。それは実に見事な開花であった。燃え上った炎は千恵の肉体までも焼えつくしてしまった。人間の住む世界は悩みも共に病にされて自らの存在を否認する。千恵は世界を克服するという無限に困難なことをなしとげ終った。令二は自問する。世界は存在する。なるほど、確の如く存在している。それにしてもこの世界から誰かが何ものかを得ているのか?　俺は知りたい……」と。　千恵の炎は令二に刻印された。その刻印は令二に常に残る。それは令二の心の中にであり、或るときはあの庭の桐の木の葉ずれのさゝやきを流して、又或るときは令二の家の燕の巣につどう燕達を通して。

庭先に立った令二の目は燕のとび交うあたりをじっとみつめていた。「千恵は生きている」

令二の眼はそう信じているようだった。

(四十四頁よりつづく)
不再生産の方程式に反射している。均衡は破壊される何故ならば消費財産業の生産物に対する需要が制限されるからである――労働者は消費できないし、資本家は消費しようとしないからである。消費財産業はだから投資に対して狭い分野を提供する、そして代って資本財産業が制限されに需要で苦しむこととなる。ここにおいてついにセイの法則は放棄され、そしてマルクスは有効需要の近代理論を予表するように思われる。ケインズ氏の言葉では、所謂分配の不平等と過度の節約によって惹き起される低い消費性向は、初期資本主義の段階における速い蓄積に対する一つの条件である、しかし、そのひきが止んでしまったときにはそれは投資誘因減退によって蓄積を阻碍し、再発の更に深刻な不況を産むこととなる。

「資本家生産の障碍は資本そのものである」。

ジョン・ロビンソン
ケンブリッジ

訳者后記

種々の意味でマルクスの再検討の必要性が説かれている時、ロビンソンのこの小論文を参照することはきわめて興味のある、意義の深いことと思い、この飜訳を思い立ったが、私の全ての点における平素の不勉強から、全く満足の出来ない結果を得て了った。時間の関係へ之も私の力の不足から克服できずにしまったこと紙数が予想外に多くなったため「註」を省略したことは、私のつたない仕事から更に手足をもぎとったようなもので、読者に対しても非常に無責任なものとなってしまったことは私としても甚だ遺憾である。あとは只諸者の学識と同情とによってこの論文の本来の意図が出来るだけ正しく汲みとられる祈るだけである。

田村美夫

0141

編集后記

叢誌「えめらるど」がどうにか出来上りましたので、皆様の机上に送ります。久しく中絶していた叢誌を再刊出来ましたのは、ひとえに諸氏の理解ある協力によるものであります。御好意に感謝すると共に、今后も一そう御後助下さることを期待して止みません。

外観、内容共に立派な復刊一号叢誌を完成しようと企図したのですが、出来上ってみると、いささか中途半端な感じがないでもありません。費用その他のハンデキャップもありましょうが、ひとえに編集者の責を負うべきものです。

なお、御多忙中煩を厭わず寄稿して下さったた叢監岡本教授、先輩笠原さん、表紙、カットを描いていただいた宇分君に編集者一同深く感謝します。

昭和二十九年十月